

青少年の生活意識と価値観 (第3報告)

目 次

第1 調査の実施概要	7
1 調査の目的	7
2 調査実施方法	7
(1) 質問項目	7
(2) 調査方法	7
3 分析対象者	8
第2 調査結果の基礎的統計分析	10
1 家庭関係	10
(1) 家庭生活に対する満足度	10
(2) 家庭生活での不満の理由	11
(3) 家族との関係	12
2 交友関係	13
(1) 友人関係に対する満足度	13
(2) 友人関係の不満の理由	14
(3) 友人との関係	16
(4) 大切な友人	17
3 周囲の人々との関係	19
(1) 経年比較	19
(2) 非行性による比較	20
4 中学生活	21
5 地域社会	22
6 人の暮らし方	23
(1) 経年比較	23
(2) 非行性による比較	24
7 社会に対する満足度	25
(1) 満足度	25
(2) 社会に対する不満の理由	26
8 態度・価値観	27
(1) 経年比較	27
(2) 非行性による比較	29
9 対人感情	30
(1) 経年比較	30
(2) 非行性による比較	31
10 同世代の者に対する見方	33
(1) 経年比較	33
(2) 非行性による比較	34
11 非行に対する意見	34

(1) 経年比較	34
(2) 非行性による比較	35
12 心のブレーキ	35
(1) 経年比較	35
(2) 非行性による比較	36
13 これからの生活で大切なこと	36
14 自分の生き方に対する満足度	37
(1) 経年比較	37
(2) 非行性による比較	37
第3 調査結果の総合的統計分析	39
1 生活満足度の因子分析	39
2 対人感情の因子分析	40
3 対人態度の因子分析	41
4 生活満足度、対人感情及び対人態度の関連について	43
(1) 仮説的な因果モデル	43
(2) 共分散構造分析による生活満足度、対人感情及び対人態度の関連の検討	43
第4 まとめ	47

第1 調査の実施概要

1 調査の目的

この調査は、非行少年の家庭・交友・社会等に対する適応感、生活意識、価値観等についての総合的、体系的な調査を全国規模で実施することにより、最近の非行少年がどのような生活意識や価値観を持っているかを把握することを目的としている。我が国において、非行少年の意識に関して、包括的、経年的に行われている研究は、数少ない¹。今回が第3回となる本調査の結果を分析し、過去における同種調査の結果との相違を明らかにすることによって、今日における少年非行の原因を探り、もって非行の防止及び非行少年の改善更生に係る諸方策を検討するための基礎資料を得ることが調査の目的である。

法務総合研究所では、平成2年に第1回調査（以下「2年調査」という。）、10年に第2回調査（以下「10年調査」という。）を実施しており、その結果は、犯罪白書^{2,3}において概要を紹介しているほか、法務総合研究所研究部報告等^{4,5,6}において詳しい報告を行っている。

なお、今回実施した第3回調査（以下「今回調査」という。）の結果の概要については、平成17年版犯罪白書に掲載した。

2 調査実施方法

(1) 質問項目

各回の調査ごとの非行少年の意識の変化が明らかになるよう、ほとんどの質問項目は、10年調査で使ったものと同一のものを用了。ただし、最近の非行少年の特質をとらえるため、関係機関が実施した同種調査の内容等を参考として、新たな質問項目を幾つか追加する一方、削除した質問項目もある。

10年調査で使った調査票と異なる質問項目は、次のとおりである。

ア 新設した質問項目

Q9 中学生活

Q10 地域社会

イ 削除した質問項目

学歴

今度の事件を起こした頃の就業状況

同じアンケートを以前に受けたことがあるかどうかの確認

(2) 調査方法

各少年鑑別所に依頼し、個別方式又は集団一斉方式で実施して回収した。なお、調査票は無記名とした。

1 総務庁青少年対策本部「非行原因に関する総合的研究調査（第3回）」、1999

2 法務総合研究所「平成2年版犯罪白書」、1990、291-330

3 法務総合研究所「平成10年版犯罪白書」、1998、308-341

4 茅場薫ほか「非行少年の生活・価値観に関する研究（第1報告）」、法務総合研究所研究部紀要34、1991、55-111

5 坪内宏介ほか「非行少年の生活・価値観に関する研究（第2報告）」、法務総合研究所研究部紀要35、1992、187-202

6 福田美喜子ほか「非行少年の生活意識と価値観」、法務総合研究所研究部報告4、1999、85-225

3 分析対象者

平成17年2月14日から同年4月15日までの2か月間に全国の少年鑑別所に観護措置で入所した者のうち、調査が可能であった、男子2,552人(88.1%)、女子345人(11.9%)の計2,897人であり、平均年齢は16.9歳であった。

今回調査の分析対象者を男女別・年齢層別に見ると、表1-1のとおりである。

なお、ここでいう年齢層とは、「年少少年」が14～15歳、「中間少年」が16～17歳、「年長少年」が18～19歳である。

表1-1 男女別・年齢層別の分析対象者

区 分	総 数	年少少年	中間少年	年長少年
総 数	2,897 (100.0)	604 (20.8)	1,178 (40.7)	1,115 (38.5)
男 子	2,552 (100.0)	500 (19.6)	1,037 (40.6)	1,015 (39.8)
女 子	345 (100.0)	104 (30.1)	141 (40.9)	100 (29.0)

注 ()内は、総数に対する年齢層別の構成比である。

分析対象者を男女別・少年鑑別所入所歴別に見ると、表1-2のとおりである。

少年鑑別所初入所の者(以下「初入者」という。)は2,065人(71.3%)、少年鑑別所再入所の者(以下「再入者」という。)は832人(28.7%)であった。また、調査対象者2,897人のうち、少年院入院歴のない者は2,564人(88.5%)、少年院入院歴のある者は333人(11.5%)であった。

表1-2 男女別・少年鑑別所入所歴別の分析対象者

区 分	総 数	初 入 者	再 入 者
総 数	2,897 (100.0)	2,065 (71.3)	832 (28.7)
男 子	2,552 (100.0)	1,791 (70.2)	761 (29.8)
女 子	345 (100.0)	274 (79.4)	71 (20.6)

注 ()内は、総数に対する少年鑑別所入所歴別の構成比である。

分析対象者を男女別・非行名別に見ると、表1-3のとおりである。男女ともに窃盗が最も多く、次いで、傷害・暴行の順となっている。男子は女子と比較して道路交通法違反が多いのに対して、女子は男子と比較して覚せい剤取締法違反及びぐ犯が多い。

表 1－3 男女別・非行名別の分析対象者

区 分	総 数	非 行 名							
		強 盗	傷害・ 暴 行	恐 喝	窃 盗	道 路 交通法	覚せい剤 取締 法	ぐ 犯	その他
総 数	2,888	117	454	213	1,055	381	71	74	523
	(100.0)	(4.1)	(15.7)	(7.4)	(36.5)	(13.2)	(2.5)	(2.6)	(18.1)
男 子	2,545	114	407	197	976	369	25	30	427
	(100.0)	(4.5)	(16.0)	(7.7)	(38.3)	(14.5)	(1.0)	(1.2)	(16.8)
女 子	343	3	47	16	79	12	46	44	96
	(100.0)	(0.9)	(13.7)	(4.7)	(23.0)	(3.5)	(13.4)	(12.8)	(28.0)

注 ()内は、総数に対する非行名別の構成比である。

第2 調査結果の基礎的統計分析

調査結果の基礎的分析では、質問項目ごとに①経年比較、②非行性による比較を行う。経年比較では、2年調査、10年調査及び今回調査の結果を比較する。非行性による比較では、少年鑑別所の初入者を非行性が「進んでいない」、再入者を非行性が「進んでいる」とみなして、両者の結果を比較する。

経年比較及び非行性による比較ともに、主にクロス集計分析によって検討する。クロス集計分析は、変数間に統計的に有意な関係があるかどうかを見るための手法であり、ここでは、 χ^2 検定を実施し、有意性を確認する。その際、できるだけ構造を単純化し、結果を理解しやすくするために、必要に応じて質問項目のカテゴリーを統合し、無回答を除いて分析する。

1 家庭関係

(1) 家庭生活に対する満足度

あなたは、家庭生活に、どのくらい満足していますか。(Q1)

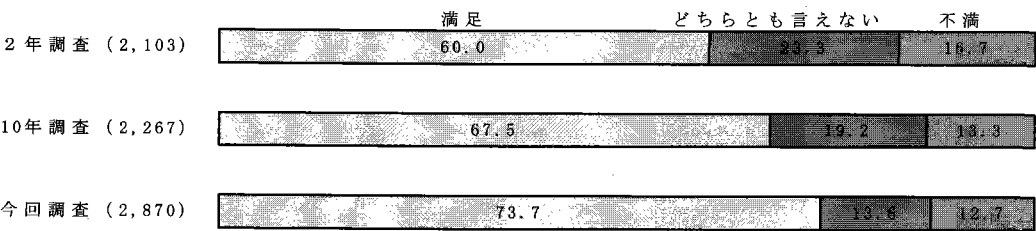
- 1 満足
- 2 やや満足
- 3 どちらともいえない
- 4 やや不満
- 5 不満

ア 経年比較

家庭生活に対してどのくらい満足しているかに関する経年比較は、図2-1-1のとおりである。

家庭生活に対する満足度を、「満足」(「満足」及び「やや満足」の合計。以下同じ。),「どちらともいえない」,「不満」(「不満」及び「やや不満」の合計。以下同じ。)の3カテゴリーに統合し、これまでの3回の調査結果の間でクロス集計を行ったところ、 χ^2 値が有意となった($\chi^2(4)=114.08^{***}$)。残差分析から「満足」の比率が次第に上昇しており、家庭生活に対する満足度が高まりつつあることがうかがわれる。

図2-1-1 家庭生活に対する満足度(経年比較)



[$\chi^2(4)=114.08^{***}$]

注 1 「満足」は、「満足」及び「やや満足」を合計したものであり、「不満」は、「不満」及び「やや不満」を合計したものである。

2 () 内は、回答者数である。

イ 非行性による比較

少年鑑別所入所歴別に見ると、家庭生活に対して「満足」と回答した者の比率は、初入者が74.3%、

再入者が72.2%で、初入者の「満足」の比率が若干高かったが、クロス集計を行い、 χ^2 値を求めたところ、有意ではなかった ($\chi^2(2)=2.88n.s.$)。

(2) 家庭生活での不満の理由

「やや不満」、「不満」とのことですが、それはどういう理由からですか。(Q2)

- 1 家庭に収入が少ない
- 2 家庭内に争いごとがある
- 3 親の愛情が足りない
- 4 親が自分を理解してくれない
- 5 病人がいる
- 6 きょうだいと気が合わない
- 7 家の周囲の環境が悪い
- 8 家が狭すぎる
- 9 ただなんとなく
- 10 その他

注 本問は、Q1で「やや不満」又は「不満」と回答した者に対してのみ質問をしている。

ア 経年比較

今回調査では、家庭で生活する上で不満としていることとして、「親が自分を理解してくれない」が43.8%と最も高く、次いで、「家庭に収入が少ない」39.2%、「家庭内に争いごとがある」38.6%の順となっていた。

家庭で生活する上で不満としている理由の上位5番目までの経年比較は、表2-1-2のとおりである。

いずれの調査でも1位は、「親が自分を理解してくれない」であった。2年調査では5位以内に入っていなかった「家庭に収入が少ない」が、10年調査では3位に、今回調査では2位となっており、金銭面での不満が上位になってきている。

表2-1-2 家庭生活での不満の理由（経年比較）

区 分	1 位	2 位	3 位	4 位	5 位
2年調査 (352)	親が自分を理解 してくれない	家庭内に争いご とがある	親の愛情が足り ない	ただなんとなく	家が狭すぎる
	53.7	47.2	30.4	29.5	27.3
10年調査 (301)	親が自分を理解 してくれない	家庭内に争いご とがある	家庭に収入が少 ない	親の愛情が足り ない	きょうだいと気 が合わない
	49.8	39.2	31.2	26.2	21.9
17年調査 (365)	親が自分を理解 してくれない	家庭に収入が少 ない	家庭内に争いご とがある	親の愛情が足り ない	家が狭すぎる
	43.8	39.2	38.6	26.0	21.9

注 1 数値は、項目に該当する者の比率である。

2 上限のない複数回答である。

3 ()内は、回答者数である。

イ 非行性による比較

少年鑑別所入所歴別に見ると、家庭で生活する上で不満とする項目の上位5番目までの順位は、初入者も再入者も同じで、不満理由に違いは見られなかった。

(3) 家族との関係

あなたは、家の中で、次（ア～キ）のことを感じたり、思ったりしたことがありますか。（Q3）

ア 家族との話を楽しいと感じる

イ 家では自分の部屋にひとりでいたいと思う

ウ 自分の将来について、親に話したいと思う

エ 自分が何をしても、親があまり気にしないと感じる

オ 親がきびしすぎると感じる

カ 親のいうことは、気まぐれであると感じる

キ 親が自分のいいなりになりすぎると感じる

（選択肢）

1 よくある 2 ときどきある 3 あまりない 4 まったくない

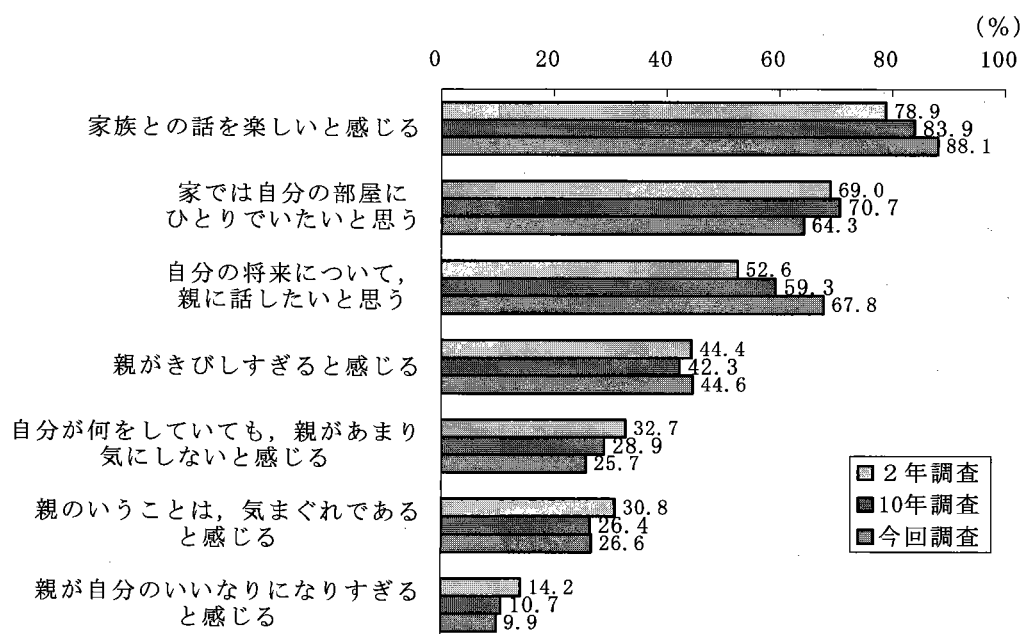
ア 経年比較

家族との関係についてどのように認識しているかに関する経年比較は、図2-1-3のとおりである。

各項目の回答を、「ある」（「よくある」及び「ときどきある」の合計。以下同じ。）、「ない」（「まったくない」及び「あまりない」の合計。以下同じ。）の2カテゴリーに統合し、これまでの3回の調査結果の間でクロス集計を行って、経年による回答に差異が見られるかどうかを検討した。

いずれの調査においても、「家族との話を楽しいと感じる」が「ある」とする者の比率が最も高く、「家では自分の部屋にひとりでいたいと思う」、「自分の将来について、親に話したいと思う」も比較的高かった。

図2-1-3 家庭との関係（経年比較）



注 「よくある」及び「ときどきある」を合計した比率である。

各項目の回答について、3回の調査結果の間でクロス集計を行ったところ、「家族との話を楽しいと感じる」($\chi^2(2)=76.18^{***}$)、「自分の将来について、親に話したいと思う」($\chi^2(2)=120.36^{***}$)の χ^2 値がそれぞれ有意となり、残差分析から「ある」の比率が次第に上昇しているところから、家族との親和的感情が高まりつつあることがうかがわれる。

他方、「家では自分の部屋にひとりでいたいと思う」($\chi^2(2)=25.70^{***}$)、「自分が何をしても、親があまり気にしないと感じる」($\chi^2(2)=28.52^{***}$)、「親の言うことは気まぐれであると感じる」($\chi^2(2)=14.04^{**}$)の χ^2 値がそれぞれ有意となり、残差分析から「ある」の比率が次第に低下しているところから、家族への否定的感情が弱まりつつあることがうかがわれる。

イ 非行性による比較

各項目の回答について、少年鑑別所入所歴別にクロス集計を行い、 χ^2 値を求めたところ、いずれの項目も有意ではなかった。

2 交友関係

(1) 友人関係に対する満足度

あなたは、友達づきあいに、どれくらい満足していますか。(Q4)

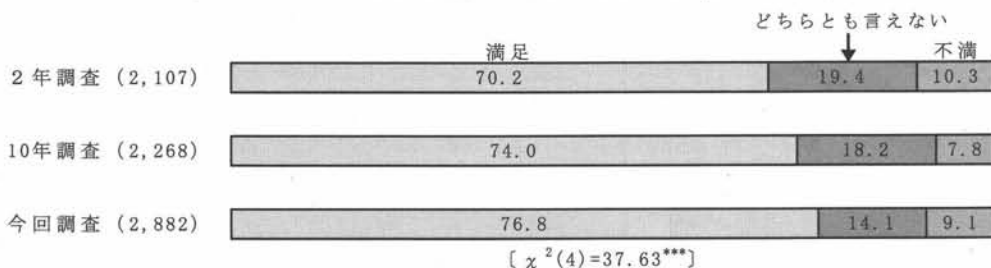
- 1 満足
- 2 やや満足
- 3 どちらとも言えない
- 4 やや不満
- 5 不満

ア 経年比較

友人関係に対してどのくらい満足しているかに関する経年比較は、図2-2-1のとおりである。

友人関係に対する満足度を、「満足」、「どちらともいえない」、「不満」の3カテゴリーに統合し、これまでの3回の調査結果の間でクロス集計を行ったところ、 χ^2 値が有意となった($\chi^2(4)=37.63^{***}$)。残差分析から「満足」の比率が次第に上昇しており、友人関係に対するの満足度が高まりつつあることがうかがわれる。

図2-2-1 友人関係に対する満足度(経年比較)



注 1 「満足」は、「満足」及び「やや満足」を合計したものであり、「不満」は、「不満」及び「やや不満」を合計したものである。

2 () 内は、回答者数である。

イ 非行性による比較

友人関係に対してどのくらい満足しているかに関する非行性による比較は、図2-2-2のとおりで

ある。

友人関係に対する満足度と少年鑑別所入所歴（初入者か再入者か）との間でクロス集計を行ったところ、 χ^2 値が有意となった（ $\chi^2(2)=41.12^{***}$ ）。残差分析から、再入者の「満足」の比率が初入者の「満足」の比率よりも低く、再入者の方が初入者と比較して友人関係においてより満足度が低いことがうかがわれる。

図 2-2-2 友人関係に対する満足度（非行性による比較）



〔 $\chi^2(2)=41.12^{***}$ 〕

注 1 「満足」は、「満足」及び「やや満足」を合計したものであり、「不満」は、「不満」及び「やや不満」を合計したものである。

2 （ ）内は、回答者数である。

(2) 友人関係の不満の理由

「やや不満」、「不満」とのことですが、それはどういう理由からですか。（Q5）

- 1 気の合う友達がいらない
- 2 お互いに心を打ち明け合うことができない
- 3 自分よりもほかの人と仲良くする
- 4 仲間はずれにされる
- 5 自分のすることに口出ししてくる
- 6 グループの中のまとまりが悪い
- 7 自分のことを分かってくれない
- 8 自分のいうことが通らない
- 9 つき合っても張り合いがなく、自分が向上しない
- 10 自分に冷たい
- 11 好きでもないのにつき合わなければならない
- 12 その他

注 本問は、Q4で「やや不満」又は「不満」と回答した者に対してのみ質問をしている。

ア 経年比較

今回調査では、友達付き合いの上で不満としていることとして、「お互いに心を打ち明け合うことができない」が52.5%と最も高く、次いで、「好きでもないのにつき合わなければならない」42.6%、「気の合う友達がいらない」38.4%の順であった。

友人関係の上で不満としている理由の上位5番目までの経年比較は、表2-2-3のとおりである。

いずれの調査でも1位は、「お互いに心を打ち明け合うことができない」であった。2年調査及び10年調査では5位であった「好きでもないのにつき合わなければならない」が今回調査では2位となった。

表 2－2－3 友人関係の不満の理由（経年比較）

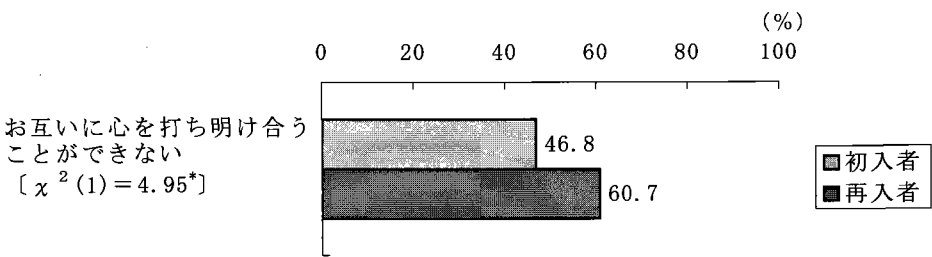
区 分	1 位	2 位	3 位	4 位	5 位
2 年調査 (218)	お互いに心を打ち明け合うことができない	気の合う友達がない	つき合っているも張り合いがなく、自分が向上しない	グループの中のまとまりが悪い	好きでもないのにつき合わなければならない
	50.0	49.5	43.6	38.5	36.7
10年調査 (178)	お互いに心を打ち明け合うことができない	気の合う友達がない	つき合っているも張り合いがなく、自分が向上しない	グループの中のまとまりが悪い	好きでもないのにつき合わなければならない
	61.2	60.7	53.4	47.2	44.9
17年調査 (263)	お互いに心を打ち明け合うことができない	好きでもないのにつき合わなければならない	気の合う友達がない	つき合っているも張り合いがなく、自分が向上しない	グループの中のまとまりが悪い
	52.5	42.6	38.4	35.0	31.6

注 1 数値は、項目に該当する者の比率である。
2 上限のない複数回答である。
3 ()内は、回答者数である。

イ 非行性による比較

各項目の回答について、少年鑑別所入所歴別にクロス集計を行ったところ、「お互いに心を打ち明け合うことができない」の χ^2 値が有意となった ($\chi^2(1)=4.95^*$)。再入者の方が初入者よりも本音で友人と付き合うことができないことを不満と感じがちであることがうかがわれる（図 2－2－4 参照）。

図 2－2－4 友人関係の不満の理由（非行性による比較）



注 1 項目に該当する者の比率である。
2 上限のない複数回答である。

(3) 友人との関係

あなたと、友達との関係について、次の中からあてはまるものを、いくつでも選んでください。
(Q6)

- 1 悲しいことがあったら話を聞いてもらう
- 2 相手にけっこう気をつかっている
- 3 あまり深刻な相談はしない
- 4 つき合っているのは、何か得るものがあるからだ
- 5 お互いに張り合う気持ちがある
- 6 けんかをし合える
- 7 何も言わなくても、分かり合えている
- 8 お互いの性格は裏の裏まで知っている
- 9 自分のすべてをさらけ出すわけではない
- 10 お互いに悪いところは悪いと言い合える
- 11 一緒にいるときでも、別々のことをしている

ア 経年比較

今回調査では、友人との関係で該当すると選択した比率として、「悲しいことがあったら話を聞いてもらう」が74.8%と最も高く、次いで、「お互いの悪いところは悪いと言い合える」68.9%、「何も言わなくても、分かり合えている」48.9%の順であった。

友人との関係で該当すると選択した項目の上位5番目までの経年比較は、表2-2-5のとおりである。

いずれの調査でも1位は、「悲しいことがあったら話を聞いてもらう」であり、2位は、「お互いの悪

表2-2-5 友人との関係（経年比較）

区 分	1 位	2 位	3 位	4 位	5 位
2年調査 (2,117)	悲しいことがあったら話を聞いてもらう	お互いに悪いところは悪いと言い合える	お互いの性格は裏の裏まで知っている	何も言わなくても、分かり合えている	けんかをし合える
	69.7	57.5	46.6	40.4	33.9
10年調査 (2,274)	悲しいことがあったら話を聞いてもらう	お互いに悪いところは悪いと言い合える	お互いの性格は裏の裏まで知っている	何も言わなくても、分かり合えている	けんかをし合える
	75.9	66.4	42.9	42.2	39.4
今回調査 (2,897)	悲しいことがあったら話を聞いてもらう	お互いに悪いところは悪いと言い合える	何も言わなくても、分かり合えている	お互いの性格は裏の裏まで知っている	けんかをし合える
	74.8	68.9	48.9	48.2	48.0

注 1 数値は、項目に該当する者の比率である。
2 上限のない複数回答である。
3 ()内は、回答者数である。

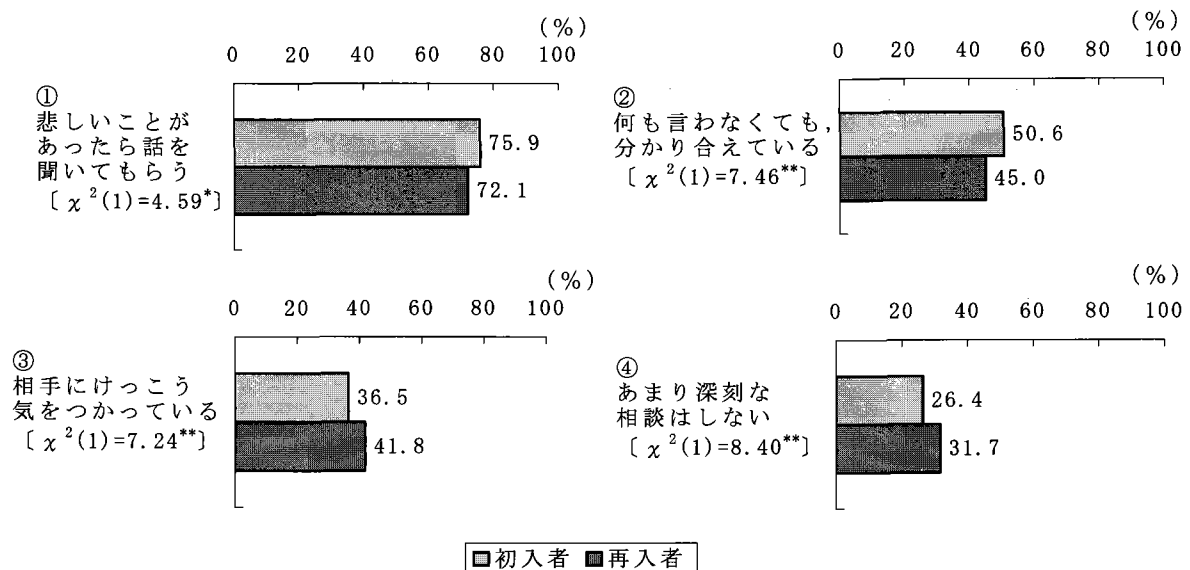
いところは悪いと言ひ合える」であった。3位から5位までに入っている項目についても各調査において同じであり、友人との関係の認知に大きな変動はないことがうかがわれる。

イ 非行性による比較

各項目の回答について、少年鑑別所入所歴別にクロス集計を行ったところ、「悲しいことがあったら話を聞いてもらう」及び「何も言わなくても、分かり合えている」の χ^2 値が有意となった(図2-2-6①,②参照)。初入者の方が再入者よりも本音で友人と付き合えていると感じていることがうかがわれる。

他方、「相手にけっこう気をつかっている」及び「あまり深刻な相談はしない」の χ^2 値も有意となった(図2-2-6③,④参照)。再入者の方が初入者よりも友人関係に距離を置いていることがうかがわれる。

図2-2-6 友人との関係(非行性による比較)



(4) 大切な友人

あなたは、どんな友達が大事だと思いますか。(Q7)

- 1 いつもそばにいて相手になってくれる人
- 2 他の人にいえないことを聞いてくれる人
- 3 競争相手となって自分を伸ばしてくれる人
- 4 いろいろな情報を教えてくれる人
- 5 困ったときに助けてくれる人
- 6 興味や趣味が似ている人

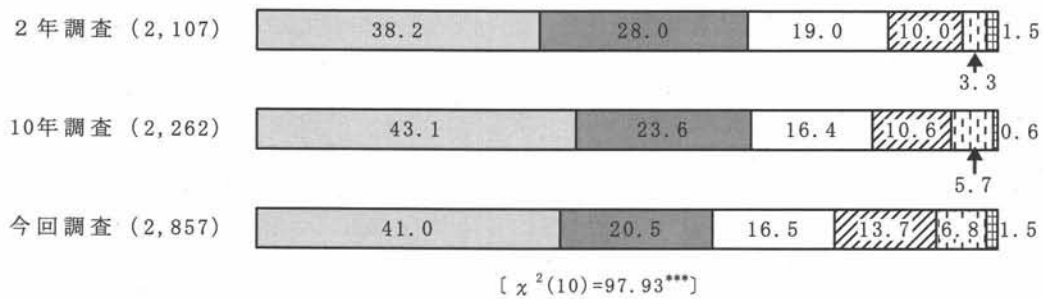
ア 経年比較

大切な友人に関する回答の経年比較は、図2-2-7のとおりである。

いずれの調査でも「困ったときに助けてくれる人」の比率が最も高く、次いで、「他の人にいえないことを聞いてくれる人」、「競争相手となって自分を伸ばしてくれる人」、「いつもそばにいて相手になってくれる人」、「興味や趣味が似ている人」の順となっている。

大切な友人に関する回答について、これまでの3回の調査結果の間でクロス集計を行ったところ、 χ^2

図 2-2-7 大切な友人（経年比較）



- | | |
|-----------------------|----------------------|
| ■ 困ったときに助けてくれる人 | ■ 他の人にいけないことを聞いてくれる人 |
| □ 競争相手となって自分を伸ばしてくれる人 | ■ いつもそばにいて相手になってくれる人 |
| □ 興味や趣味が似ている人 | □ いろいろな情報を教えてくれる人 |

注 () 内は、回答者数である。

値が有意となった($\chi^2(10)=97.93^{***}$)。残差分析の結果では、「他の人にいけないことを聞いてくれる人」の比率が低下傾向にあり、他方、「いつもそばにいて相手になってくれる人」、「興味や趣味が似ている人」の比率が上昇傾向にあることから、当たり障りなく楽しみを共有でき、寂しさを紛らわす相手になってくれる友人を求める傾向が徐々に強まっていることがうかがわれる。

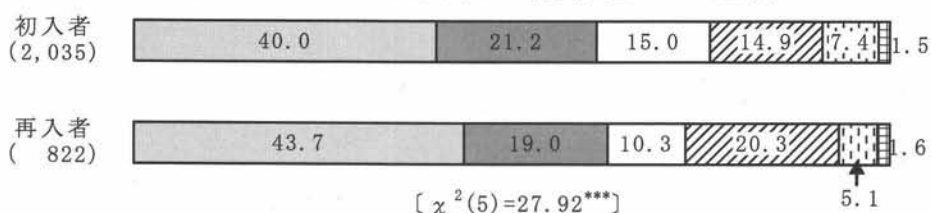
イ 非行性による比較

今回調査において、少年鑑別所入所歴別に大切な友人として回答した項目の比率を見ると、図 2-2-8 のとおりである。

クロス集計を行ったところ、 χ^2 値が有意となった($\chi^2(5)=27.92^{***}$)。残差分析では、「競争相手となって自分を伸ばしてくれる人」の比率が初入者より再入者の方が高く、「いつもそばにいて相手になってくれる人」の比率が再入者よりも初入者の方が高くなっていた。

再入者の方が大切な友人として自分を伸ばしてくれる人を初入者よりも求めているのに対し、初入者はいつも相手をしてくれる人を再入者よりも求めていることがうかがわれる。

図 2-2-8 大切な友人（非行性による比較）



- | | |
|-----------------------|----------------------|
| ■ 困ったときに助けてくれる人 | ■ 他の人にいけないことを聞いてくれる人 |
| □ 競争相手となって自分を伸ばしてくれる人 | ■ いつもそばにいて相手になってくれる人 |
| □ 興味や趣味が似ている人 | □ いろいろな情報を教えてくれる人 |

注 () 内は、回答者数である。

3 周囲の人々との関係

あなたにとって、次の質問（ア～エ）にあてはまる人はどんな人ですか。（Q8）

ア あなたが、気楽に話ができると思うのはどの人ですか

イ あなたが、悩みを打ち明けられると思うのはどの人ですか

ウ あなたが、「この人から注意されたら言うことを聞く」と思うのはどの人ですか

エ あなたが、「こんな人になりたい」と思うのはどんな人物ですか

（選択肢）

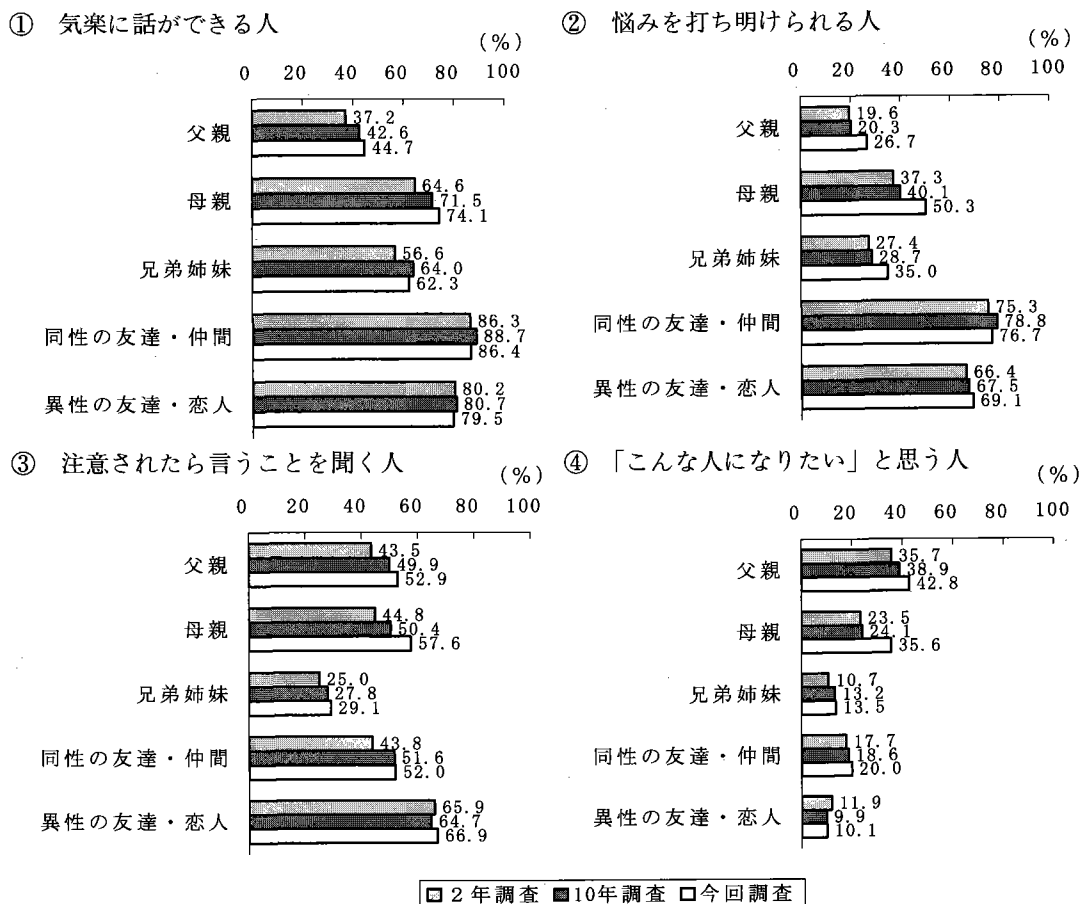
- | | | | | |
|------------|------------|--------|----------|--------|
| 1 父親 | 2 母親 | 3 兄弟姉妹 | 4 祖父母 | 5 親戚の人 |
| 6 同性の友達・仲間 | 7 異性の友達・恋人 | 8 先輩 | | |
| 9 先生 | 10 近所の人 | 11 その他 | 12 誰もいない | |

（1）経年比較

少年たちが日常的に接している家族や友達など周囲の人々をどのように評価し、どのようにかかわっているか、あるいは、どのような人物を自己の同一視の対象として見ているかなど、身近な人間関係についてのとらえ方を尋ねた。各質問に対する回答の経年比較は、図2-3-1のとおりである。

ア 「あなたが、気楽に話ができると思うのはどの人ですか」との質問に対して該当するとされた項目

図2-3-1 周囲の人々との関係（経年比較）



注 1 項目に該当する者の比率である。
2 上限のない複数回答である。

の比率は、いずれの調査でも、同性の友達・仲間が最も高く、次いで、異性の友達・恋人、母親、兄弟姉妹、父親の順であった。母親、父親が該当するとされた比率が上昇傾向にある。

イ 「あなたが、悩みを打ち明けられると思うのはどの人ですか」との質問に対して該当するとされた項目の比率は、いずれの調査でも、同性の友達・仲間が最も高く、次いで、異性の友達・恋人、母親、兄弟姉妹、父親の順であった。母親、兄弟姉妹、父親が該当するとされた比率が上昇傾向にある。

ウ 「あなたが、『この人から注意されたい』と思うのはどの人ですか」との質問に対して該当するとされた項目の比率は、いずれの調査でも、異性の友達・恋人が最も高いが、比率は、ほとんど変化していない。他方、母親、父親が該当するとされた比率は上昇傾向にあり、今回調査では、母親及び父親が該当するとされた比率が同性の友達・仲間を上回った。

エ 「あなたが、『こんな人になりたい』と思うのはどんな人物ですか」との質問に対して該当するとされた項目の比率は、いずれの調査も、父親が最も高い。母親、父親が該当するとされた比率は上昇傾向にある。

周囲の人々との関係を経年比較で見ると、全般的に同性及び異性の友人との心理的距離が比較的近いまま推移しているが、最近になるほど、父親及び母親との心理的距離が縮まりつつあることがうかがわれる。

(2) 非行性による比較

ア 「あなたが、気楽に話ができると思うのはどの人ですか」との質問に対して該当するとされた項目の比率の順位を高い方から比較したところ、初入者も再入者も第1位が同性の友達・仲間、第2位が異性の友達・恋人、第3位が母親となり、同じ順位であった。

イ 「あなたが、悩みを打ち明けられると思うのはどの人ですか」との質問に対して該当するとされた項目の比率の順位を高い方から比較したところ、初入者は、第1位が同性の友達・仲間、第2位が異性の友達・恋人、第3位が母親であった。他方、再入者は、第1位が異性の友達・恋人、第2位が同性の友達・仲間、第3位が母親であった。再入者の方が初入者よりも異性の友達・恋人を相談相手とみなしやすい傾向がうかがわれる。

ウ 「あなたが、『この人から注意されたい』と思うのはどの人ですか」との質問に対して該当するとされた項目の比率の順位を高い方から比較したところ、初入者は、第1位が異性の友達・恋人、第2位が母親、第3位が同性の友達・仲間であった。他方、再入者は、第1位が異性の友達・恋人、第2位が母親、第3位が父親であった。初入者の方が再入者よりも同性の仲間との結び付きが強く、その注意に従う傾向の強いことがうかがわれる。

エ 「あなたが、『こんな人になりたい』と思うのはどんな人物ですか」との質問に対して該当するとされた項目の比率の順位を高い方から比較したところ、初入者も再入者も第1位が父親、第2位が母親、第3位が先輩となり、同じ順位であった。

4 中学生活

あなたが中学生の時、次（ア～キ）のことが、どれくらいあてはまりましたか。（Q9）

ア 学校に行くのがいやだった

イ 授業中じっとすわっているのがつらかった

ウ 話のわかる先生がたくさんいた

エ 学校の先生を尊敬していた

オ 先生にペコペコする生徒をみると腹が立った

カ 学校行事をみんなでやるのがうっとうしかった

キ 休み時間はみんなと過ごすよりもひとりでいることが多かった

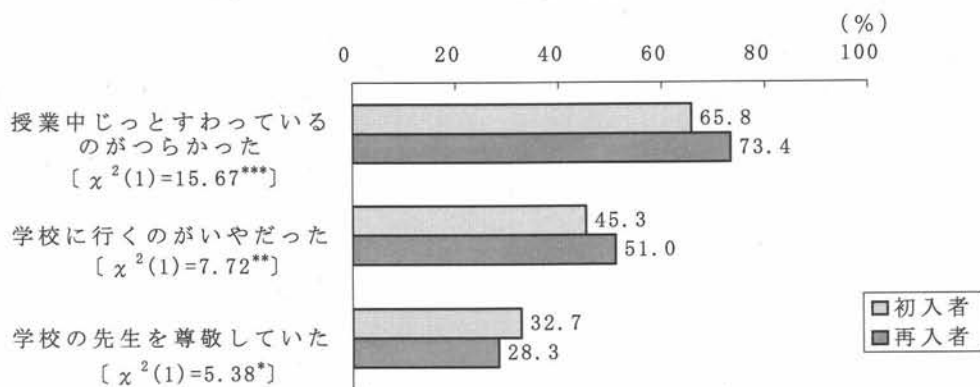
（選択肢）

- 1 とてもあてはまる 2 ややあてはまる 3 あまりあてはまらない
4 まったくあてはまらない

この質問は、今回調査で新たに追加したものであることから、非行性による比較のみを行う。

中学生活の様子について、「あてはまる」（「とてもあてはまる」及び「ややあてはまる」の合計。以下本項において同じ。）、「あてはまらない」（「まったくあてはまらない」及び「あまりあてはまらない」の合計。以下本項において同じ。）の2カテゴリーに統合し、少年鑑別所入所歴との間でクロス集計を行ったところ、 χ^2 値が有意となった項目は、図2-4-1のとおりである。

図2-4-1 中学生活（非行性による比較）



注 項目に該当する者の比率である。

「授業中じっとすわっているのがつらかった」に対して、「あてはまる」と回答した比率は、初入者が65.8%、再入者が73.4%で再入者の方が有意に高かった ($\chi^2(1)=15.67^{***}$)。「学校に行くのがいやだった」に対して、「あてはまる」と回答した比率も、初入者が45.3%、再入者が51.0%で再入者の方が有意に高かった ($\chi^2(1)=7.72^{**}$)。

他方、「学校の先生を尊敬していた」に対して、「あてはまる」と回答した比率は、初入者が32.7%、再入者が28.3%で初入者の方が有意に高かった ($\chi^2(1)=5.38^*$)。

中学生活について、再入者の方が初入者よりも、授業中にじっとしていらなかったことや登校をつらく感じていたことがうかがわれる。他方、初入者の方が再入者よりも学校の先生を尊敬する気持ちが強かったことがうかがわれる。

5 地域社会

あなたの住んでいる地域や町について、次（ア～オ）のことが、どれくらいあてはまりますか。
(Q10)

ア 近所の大人の人は、道で会ったら、気軽に私に声をかけてくれる

イ 地域の中で、アダルトビデオやエッチな雑誌を買ったり、借りるのは簡単だ

ウ 地域の中で、酒やタバコを買うのは簡単だ

エ 子供がなぐり合いのけんかをしていたら、まわりの人は注意してやめさせるだろう

オ 子供がなぐり合いのけんかをしていたら、まわりの人は学校や警察に連絡するだろう

(選択肢)

1 あてはまる 2 だいたいあてはまる 3 あてはまらない

この質問は、今回調査で新たに追加したものであることから、非行性による比較のみを行う。

地域社会に関する各項目の回答の少年鑑別所入所歴別の比率は、図2-5-1のとおりである。

各項目の回答と少年鑑別所入所歴との間でクロス集計を行ったところ、すべての項目で χ^2 値が有意となった。残差分析の結果からは、初入者の方が再入者よりも「近所の大人の人は、道で会ったら、気軽

図2-5-1 地域社会（非行性による比較）

① 近所の大人の人は、道で会ったら、気軽に私に声をかけてくれる

	あてはまる	だいたい あてはまる	あてはまらない
初入者(2,038)	35.4	38.0	26.5
再入者(826)	37.0	33.2	29.8

$$[\chi^2(2)=6.45^*]$$

② 地域の中で、アダルトビデオやエッチな雑誌を買ったり、借りるのは簡単だ

初入者(2,033)	28.1	27.7	44.2
再入者(825)	38.3	27.3	34.4

$$[\chi^2(2)=33.04^{***}]$$

③ 地域の中で、酒やタバコを買うのは簡単だ

初入者(2,038)	58.6	29.3	12.0
再入者(826)	70.5	24.3	5.2

$$[\chi^2(2)=45.68^{***}]$$

④ 子どもがなぐり合いのけんかをしていたら、まわりの人は注意をしてやめさせるだろう

初入者(2,035)	45.4	38.7	15.9
再入者(825)	50.3	30.3	19.4

$$[\chi^2(2)=18.78^{***}]$$

図 2-5-1 地域社会（非行性による比較）（続き）

⑤ 子どもがなぐり合いのけんかをしていたら、まわりの人は学校や警察に連絡するだろう

初入者(2,035)	36.4	40.4	23.2
再入者(825)	46.4	36.5	17.1

$$[\chi^2(2)=27.46^{***}]$$

注 () 内は、回答者数である。

に私に声をかけてくれる」について肯定的に回答する傾向が強いのにに対し、再入者の方が初入者よりも「地域の中で、アダルトビデオやエッチな雑誌を買ったり、借りるのは簡単だ」、「地域の中で、酒やタバコを買うのは簡単だ」について肯定的に回答する傾向が強いことがうかがわれる。また、子供の殴り合いの喧嘩については、初入者の方が再入者よりも「まわりの人が注意をしてやめさせる」と回答する傾向が強いのにに対し、再入者の方が初入者よりも「まわりの人は学校や警察に連絡するだろう」と回答する傾向が強いことがうかがわれる。

再入者の方が初入者よりも、地域社会において性的なものや違法なものへの接近が容易であると認識していること、初入者の方が再入者よりも、地域社会の人々が身近なトラブルに積極的に介入してくれると認識していることがうかがわれる。ただし、子供のトラブルに対して地域の人々が学校や警察に通報すると認識している比率は、再入者の方が高かった。これは自分たちの逸脱行動を通報されるという不信感が再入者の方が強いことを反映した結果ではないかと思われる。

6 人の暮らし方

人の暮らし方について、いろいろな考え方がありますが、次の考え方の中で、あなたはどれを選びますか。(Q11)

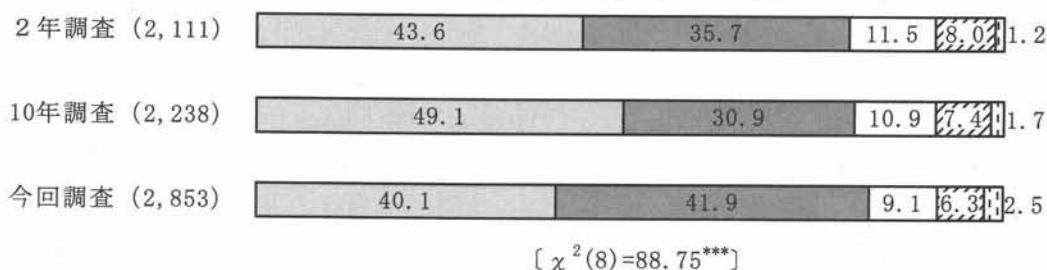
- 1 いっしょうけんめい働き、倹約して金持ちになる
- 2 まじめに勉強して名をあげる
- 3 金や名誉を考えずに、自分の趣味に合った暮らし方をする
- 4 その日その日をのんきに、くよくよしないで暮らす
- 5 世の中の正しくないことを押しのけて、どこまでも清く正しく暮らす

(1) 経年比較

人の暮らし方に関する回答の経年比較は、図 2-6-1 のとおりである。

人の暮らし方に関する回答について、これまでの3回の調査結果の間でクロス集計を行ったところ、 χ^2 値が有意となった($\chi^2(8)=88.75^{***}$)。人の暮らし方として最もよいと思うものと選択した比率は、2年調査及び10年調査では、「金や名誉を考えずに、自分の趣味に合った暮らし方をする」が最も高く、次いで、「いっしょうけんめい働き、倹約して金持ちになる」、「その日その日をのんきに、くよくよしないで暮らす」の順であった。他方、今回調査では、「いっしょうけんめい働き、倹約して金持ちになる」が41.9%と最も高く、次いで、「金や名誉を考えずに、自分の趣味に合った暮らし方をする」40.1%、「その日その日をのんきに、くよくよしないで暮らす」9.1%、「世の中の正しくないことを押しのけて、どこまでも清く正しく暮らす」6.3%、「まじめに勉強して名をあげる」2.5%の順であった。

図 2-6-1 人の暮らし方 (経年比較)



- ☐ 金や名誉を考えずに、自分の趣味に合った暮らし方をする
☐ その日その日をのんきに、くよくよしないで暮らす
☐ まじめに勉強して名をあげる

- ☐ いっしょうけんめい働き、節約して金持ちになる
☒ 世の中の正しくないことを押しのけて、どこまでも清く正しく暮らす

注 () 内は、回答者数である。

残差分析では、「金や名誉を考えずに、自分の趣味に合った暮らし方をする」の比率が低下し、「いっしょうけんめい働き、節約して金持ちになる」が上昇しており、金銭面での成功を第一に考える者が増えてきていることがうかがわれる。

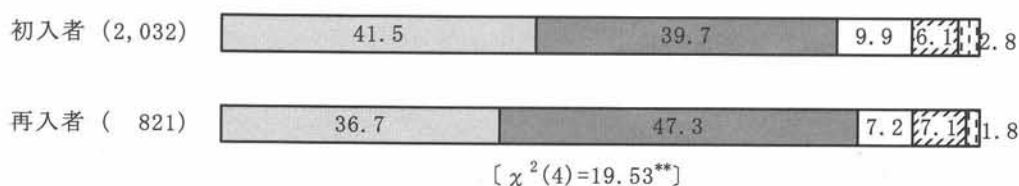
(2) 非行性による比較

人の暮らし方として最もよいと思うものと選択した各項目の比率を少年鑑別所入所歴別に見ると、図 2-6-2 のとおりである。

クロス集計を行ったところ、 χ^2 値が有意となった ($\chi^2(4)=19.53^{**}$)。残差分析によって初入者と再入者を比較すると、「いっしょうけんめい働き、節約して金持ちになる」を、再入者の47.3%が選択したのに対し、初入者は39.7%しか選択しなかった。他方、「金や名誉を考えずに、自分の趣味に合った暮らし方をする」は、初入者が41.5%選択したのに対し、再入者が36.7%で、「その日その日をのんきに、くよくよしないで暮らす」も、初入者が9.9%選択したのに対し、再入者が7.2%であった。

再入者の方が金銭面での成功を第一に考えやすい傾向が強いのに対し、初入者の方が現状維持的な志向が強いことがうかがわれる。

図 2-6-2 人の暮らし方 (非行性による比較)



- ☐ 金や名誉を考えずに、自分の趣味に合った暮らし方をする
☐ その日その日をのんきに、くよくよしないで暮らす
☐ まじめに勉強して名をあげる

- ☐ いっしょうけんめい働き、節約して金持ちになる
☒ 世の中の正しくないことを押しのけて、どこまでも清く正しく暮らす

注 () 内は、回答者数である。

7 社会に対する満足度

(1) 満足度

あなたは今の社会について、どのくらい満足していますか。(Q12)

- 1 満足
- 2 やや満足
- 3 どちらとも言えない
- 4 やや不満
- 5 不満

ア 経年比較

社会に対してどのくらい満足しているかに関する経年比較は、図2-7-1のとおりである。

社会に対する満足度を、「満足」、「どちらとも言えない」、「不満」の3カテゴリーに統合し、これまでの3回の調査結果の間でクロス集計を行ったところ、 χ^2 値は有意ではなかった ($\chi^2(4)=7.17$ n.s.)。社会に対して「満足」とする者の比率は、2年調査が35.8%、10年調査が32.9%、今回調査が33.9%とほぼ横ばいである。

図2-7-1 社会に対する満足度（経年比較）

	満足	どちらとも言えない	不満
2年調査 (2,093)	35.8	42.7	21.5
10年調査 (2,251)	32.9	42.8	24.3
今回調査 (2,860)	33.9	42.2	23.8

[$\chi^2(4)=7.17$ n.s.]

注 1 「満足」は、「満足」及び「やや満足」を合計したものであり、「不満」は、「不満」及び「やや不満」を合計したものである。

2 () 内は、回答者数である。

イ 非行性による比較

社会に対して「満足」と回答した者の比率を少年鑑別所入所歴別に見ると、初入者が32.8%、再入者が36.6%であった。クロス集計を行ったところ、 χ^2 値は有意ではなかった ($\chi^2(2)=3.80$ n.s.)。再入者と初入者の間には、社会に対する満足度に差はないことがわかる。

(2) 社会に対する不満の理由

「やや不満」、「不満」とのことですが、それはどういう理由からですか。(Q13)

- 1 社会のしくみがきまりきっている
- 2 若者の意見は反映されない
- 3 正しいと思うことが通らない
- 4 国民の意見がまとまっていない
- 5 金持ちと貧乏な人との差が大きすぎる
- 6 まじめな者がむくわれない
- 7 人々の考え方や行動が乱れている
- 8 その他

注 本問は、Q12で「やや不満」又は「不満」と回答した者に対してのみ質問をしている。

ア 経年比較

社会に対する不満の理由の上位5番目までの経年比較は、表2-7-2のとおりである。2年調査及び今回調査では、「金持ちと貧乏な人との差が大きすぎる」が最も高く、次いで、「若者の意見は反映されない」であった。10年調査では、「若者の意見は反映されない」が最も高かった。今回調査では、不満の理由数を多く選択した者が増加しており、各理由の選択率が上昇しているのが特徴的である。

イ 非行性による比較

今回調査において、少年鑑別所入所歴別に社会に対する不満の理由とされた比率を比較すると、「その他」について、初入者が29.2%，再入者が40.9%であり、 χ^2 値が有意であった($\chi^2(1)=8.61^{**}$)。再入者の方が初入者よりも選択肢として明示した不満理由以外のさまざまな理由で社会に対する不満を抱いていることがうかがわれる。

表2-7-2 社会に対する不満理由（経年比較）

区 分	1 位	2 位	3 位	4 位	5 位
2年調査 (655)	金持ちと貧乏な 人との差が大き すぎる	若者の意見は反 映されない	社会のしくみが きまりきってい る	正しいと思うこ とが通らない	人々の考え方や 行動が乱れてい る
	46.3	40.5	33.7	33.6	31.3
10年調査 (847)	若者の意見は反 映されない	金持ちと貧乏な 人との差が大き すぎる	正しいと思うこ とが通らない	社会のしくみが きまりきってい る	人々の考え方や 行動が乱れてい る
	40.7	39.2	36.1	33.8	28.5
17年調査 (682)	金持ちと貧乏な 人との差が大き すぎる	若者の意見は反 映されない	正しいと思うこ とが通らない	人々の考え方や 行動が乱れてい る	社会のしくみが きまりきってい る
	73.5	62.5	57.3	50.4	42.4

- 注 1 数値は、項目に該当する者の比率である。
2 上限のない複数回答である。
3 ()内は、回答者数である。

8 態度・価値観

あなたは、次の意見（ア～テ）に賛成ですか。それとも反対ですか。（Q14）

ア ひとつのことに熱中するよりも、いろいろなことをやってみるべきだ

イ 年上や目上の人には従うべきだ

ウ コツコツ努力するよりは、毎日の生活を楽しくやった方がよい

エ 自分の意見とちがっていても多数の意見には従うべきだ

オ 自然を守ることも大切だが、生活を便利にする方がもっと大事だ

カ 人のことにはあまり深入りしない方がよい

キ 男は外で働き、女は家庭を守るべきだ

ク 世の中は、なるようにしかならないものだ

ケ まじめな人よりも、ひょうきんにふるまう人の方が好きだ

コ まわりから何か言われないように、目立たないようにする方がよい

サ 悪い者をやっつけるためならば、場合によって腕力に訴えてもよい

シ 世の中全体のことを考えるよりも、自分のしたいことをする方がよい

ス 自分のやりたいことをやりぬくためには、ルールを破るのも仕方がないことだ

セ 義理人情を大切にすべきだ

ソ 努力するよりも、要領よくふるまう方がよい

タ リーダーになって苦勞するよりは、人に従っていた方が気楽でいい

チ 将来のために現在の楽しみをがまんするのはばかげている

ツ 自分の命をどうだめにしようと私の勝手だ

テ ボランティア活動などを通じて、世の中のためになることが必要だ

（選択肢）

1 賛成 2 やや賛成 3 どちらともいえない 4 やや反対 5 反対

(1) 経年比較

態度・価値観に関する各項目の回答を、「賛成」（「賛成」及び「やや賛成」の合計。以下同じ。）、「どちらともいえない」、「反対」（「反対」及び「やや反対」の合計。以下同じ。）の3カテゴリーに統合し、これまでの3回の調査結果の間でクロス集計を行って、経年による回答に差異が見られるかどうかを検討した。各項目に対して「賛成」と回答した比率の経年比較及びクロス集計によって得られた χ^2 値は、表2-8-1のとおりである。

今回調査では、「ボランティア活動などを通じて、世の中のためになることが必要だ」について「賛成」とする者の比率が、80.0%と最も高く、次いで、「義理人情を大切にすべきだ」65.7%、「ひとつのことに熱中するよりも、いろいろなことをやってみるべきだ」61.4%の順であった。

各項目の回答の経年比較では、「コツコツ努力するよりは、毎日の生活を楽しくやった方がよい」（ $\chi^2(4)=14.25^{**}$ ）、「まじめな人よりも、ひょうきんにふるまう人の方が好きだ」（ $\chi^2(4)=281.31^{***}$ ）、「悪い者をやっつけるためならば、場合によって腕力に訴えてもよい」（ $\chi^2(4)=203.61^{***}$ ）において、「賛成」の比率が3回の調査で次第に低下を示し、 χ^2 値もそれぞれ有意であった。その場の楽しさや楽しい人との交際を求めようとする姿勢及び暴力によって問題解決を図ろうとする姿勢が弱まりつつあることがうかがわれる。

表 2 - 8 - 1 態度・価値観（経年比較）

区 分	2 年調査	10年調査	今回調査	検定結果
ア ひとつのことに熱中するよりも、いろいろなことをやってみるべきだ	65.6	60.5	61.4	$\chi^2(4)=18.17^{**}$
イ 年上や目上の人には従うべきだ	43.5	41.6	48.9	$\chi^2(4)=55.09^{***}$
ウ コツコツ努力するよりは、毎日の生活を楽しくやった方がよい	41.3	37.4	36.9	$\chi^2(4)=14.25^{**}$
エ 自分の意見とちがっていても多数の意見には従うべきだ	27.8	22.8	32.6	$\chi^2(4)=60.74^{***}$
オ 自然を守ることも大切だが、生活を便利にする方がもっと大事だ	27.5	22.0	24.8	$\chi^2(4)=33.46^{***}$
カ 人のことにはあまり深入りしない方がよい	46.5	46.3	47.8	$\chi^2(4)=15.27^{**}$
キ 男は外で働き、女は家庭を守るべきだ	66.9	52.7	55.7	$\chi^2(4)=120.19^{***}$
ク 世の中は、なるようにしかならないものだ	34.6	28.8	37.1	$\chi^2(4)=46.46^{***}$
ケ まじめな人よりも、ひょうきんにふるまう人の方が好きだ	79.2	71.7	58.3	$\chi^2(4)=281.31^{***}$
コ まわりから何か言われないように、目立たないようにする方がよい	19.1	17.1	20.2	$\chi^2(4)=50.72^{***}$
サ 悪い者をやっつけるためならば、場合によって腕力に訴えてもよい	60.6	45.3	44.7	$\chi^2(4)=203.61^{***}$
シ 世の中全体のことを考えるよりも、自分のしたいことをする方がよい	30.5	36.6	35.3	$\chi^2(4)=24.96^{***}$
ス 自分のやりたいことをやりぬくためには、ルールを破るのも仕方がないことだ	16.1	16.4	14.5	$\chi^2(4)=6.18^{*}$
セ 義理人情を大切にすべきだ	73.8	65.3	65.7	$\chi^2(4)=52.76^{***}$
ソ 努力するよりも、要領よくふるまう方がよい	27.1	23.3	27.4	$\chi^2(4)=15.73^{**}$
タ リーダーになって苦勞するよりは、人に従っていた方が氣楽でいい	17.7	17.3	23.8	$\chi^2(4)=75.82^{***}$
チ 将来のために現在の楽しみをがまんするのはばかげている	...	31.6	27.1	$\chi^2(2)=38.69^{***}$
ツ 自分の命をどうためにしようと私の勝手だ	...	16.6	15.8	$\chi^2(2)=22.51^{***}$
テ ボランティア活動などを通じて、世の中のためになることが必要だ	...	74.3	80.0	$\chi^2(2)=23.94^{***}$

注 数値は、「賛成」及び「やや賛成」の比率を合計したものである。

他方、「世の中全体のことを考えるよりも、自分のしたいことをする方がよい」($\chi^2(4)=24.96^{***}$)、「リーダーになって苦勞するよりは、人に従っていた方が氣楽でいい」($\chi^2(4)=75.82^{***}$)において、「賛成」の比率が3回の調査で次第に上昇傾向を示し、 χ^2 値もそれぞれ有意であった。世の中や周囲の人を

リードしていくことよりも、気楽に自分のしたいことをしようとする姿勢が強まりつつあることがうかがわれる。

その他にも経年比較において χ^2 値が有意であった項目があるが、多くが10年調査において2年調査よりも比率が低下した後、今回調査で比率が上昇したものであり、一貫した傾向はうかがわれなかった。

(2) 非行性による比較

今回調査において、態度・価値観に関する回答と少年鑑別所入所歴との間のクロス集計によって、 χ^2 値が有意となった項目は、図2-8-2のとおりである。

初入者の方が再入者よりも「賛成」とする者の比率が高かった項目は、「コツコツ努力するよりは、毎日の生活を楽しくやった方がよい」、「まじめな人よりも、ひょうきんにふるまう人の方が好きだ」、「世の中全体のことを考えるよりも、自分のしたいことをする方がよい」、「自分のやりたいことをやりぬくためには、ルールを破るのも仕方がないことだ」、「努力するよりも、要領よくふるまう方がよい」、「リー

図2-8-2 態度・価値観（非行性による比較）

① 初入者>再入者

ウ コツコツ努力するよりは、毎日の生活を楽しくやった方がよい

	賛成	どちらとも言えない	反対
初入者 (2,042)	39.9	32.0	28.1

	賛成	どちらとも言えない	反対
再入者 (826)	29.4	26.4	44.2

$[\chi^2(2)=70.04^{***}]$

シ 世の中全体のことを考えるよりも、自分のしたいことをする方がよい

	賛成	どちらとも言えない	反対
初入者 (2,028)	36.0	31.4	32.5

	賛成	どちらとも言えない	反対
再入者 (821)	33.4	27.8	38.9

$[\chi^2(2)=10.51^{**}]$

ソ 努力するよりも、要領よくふるまう方がよい

	賛成	どちらとも言えない	反対
初入者 (2,023)	28.0	39.2	32.8

	賛成	どちらとも言えない	反対
再入者 (821)	25.9	33.3	40.8

$[\chi^2(2)=17.17^{***}]$

チ 将来のために現在の楽しみをがまんするのはばかげている

	賛成	どちらとも言えない	反対
初入者 (2,026)	29.7	31.1	39.2

	賛成	どちらとも言えない	反対
再入者 (820)	20.6	25.5	53.9

$[\chi^2(2)=53.18^{***}]$

② 再入者>初入者

キ 男は外で働き、女は家庭を守るべきだ

	賛成	どちらとも言えない	反対
初入者 (2,029)	52.7	25.4	21.8

	賛成	どちらとも言えない	反対
再入者 (821)	63.0	21.3	15.7

$[\chi^2(2)=25.99^{***}]$

ケ まじめな人よりも、ひょうきんにふるまう人の方が好きだ

	賛成	どちらとも言えない	反対
初入者 (2,027)	60.2	29.8	10.0

	賛成	どちらとも言えない	反対
再入者 (820)	53.4	32.4	14.1

$[\chi^2(2)=15.13^{**}]$

ス 自分のやりたいことをやりぬくためには、ルールを破るのも仕方がないことだ

	賛成	どちらとも言えない	反対
初入者 (2,029)	14.8	26.6	58.6

	賛成	どちらとも言えない	反対
再入者 (821)	13.6	18.9	67.5

$[\chi^2(2)=22.40^{***}]$

タ リーダーになって苦労するよりは、人に従っていた方が気楽でいい

	賛成	どちらとも言えない	反対
初入者 (2,026)	24.1	29.9	46.0

	賛成	どちらとも言えない	反対
再入者 (819)	22.8	22.6	54.6

$[\chi^2(2)=20.38^{***}]$

ク 世の中は、なるようにしかならないものだ

	賛成	どちらとも言えない	反対
初入者 (2,026)	36.3	34.3	29.4

	賛成	どちらとも言えない	反対
再入者 (820)	39.1	30.9	30.0

$[\chi^2(2)=3.45^*]$

注 () 内は、回答者数である。

ダーになって苦勞するよりは、人に従っていた方が氣楽でいい」、「将来のために現在の楽しみをがまんするのはばかげている」であった。他方、再入者の方が初入者よりも「賛成」とする者の比率が高かった項目は、「男は外で働き、女は家庭を守るべきだ」、「世の中は、なるようにしかならないものだ」であった。

初入者の方が再入者と比較して、享樂的志向や自己優先志向が強いのに對し、再入者の方が初入者と比較して、努力放棄的な志向や傳統的な性役割観が強いことがうかがわれる。

9 対人感情

あなたは、日ごろの生活で、次（ア～シ）のような感じになることがありますか。（Q15）

ア 世の中には自分しか信じるものがないという感じ

イ 世の中は結局金だけが頼りだという感じ

ウ 心のあたたま思いが少ないという感じ

エ 自分の性格がいやになるという感じ

オ 自分は何をやってもだめな人間だという感じ

カ 自分は世の中から取り残されているという感じ

キ 自分だけが悪く思われているという感じ

ク 自分は意志が弱いという感じ

ケ 自分がものごとに打ち込んでいるという感じ

コ 自分は頼りにされているという感じ

サ 自分の努力がだんだん実ってきているという感じ

シ 世の中の人々は互いに助け合っているという感じ

（選択肢）

1 よくある 2 ときどきある 3 あまりない 4 まったくない

（1）経年比較

対人感情に関する各項目の回答を、「ある」（「よくある」及び「ときどきある」の合計。以下同じ。）、「ない」（「まったくない」及び「あまりない」の合計。以下同じ。）の2カテゴリーに統合し、これまでの3回の調査結果の間でクロス集計を行って、経年による回答に差異がみられるかどうかを検討した。各項目に対して「ある」と回答した比率の経年比較及びクロス集計によって得られた χ^2 値は、表2-9-1のとおりである。

今回調査について見ると、劣等感と関係する項目では、「自分は意志が弱いという感じ」が「ある」とする者の比率は、72.6%と高く、「自分の性格がいやになるという感じ」が「ある」とする者の比率も72.5%と同様に高かった。自分の能力への自信の程度を意味する自己効力感と関連する項目では、「自分がものごとに打ち込んでいるという感じ」が「ある」とする者の比率が70.4%、「自分は頼りにされているという感じ」が「ある」とする者の比率が63.8%、「自分の努力がだんだん実ってきているという感じ」が「ある」とする者の比率が61.2%であった。不信感と関連する項目では、「世の中は結局金だけが頼りだという感じ」が「ある」とする者の比率が61.8%と比較的高かったが、「心のあたたま思いが少ないという感じ」が「ある」とする者の比率が39.6%、「世の中には自分しか信じるものがないという感じ」が「ある」とする者の比率が32.3%と比較的低かった。

表 2 - 9 - 1 対人感情（経年比較）

区 分	2 年調査	10年調査	今回調査	検定結果
ア 世の中には自分しか信じるものがないという感じ	44.0	40.4	32.3	$\chi^2(2)=77.30^{***}$
イ 世の中は結局金だけが頼りだという感じ	74.8	70.5	61.8	$\chi^2(2)=98.81^{***}$
ウ 心のあたたまる思いが少ないという感じ	55.3	45.1	39.6	$\chi^2(2)=121.83^{***}$
エ 自分の性格がいやになるという感じ	74.3	71.8	72.5	$\chi^2(2)=3.66^*$
オ 自分は何をやってもだめな人間だという感じ	57.8	51.9	53.4	$\chi^2(2)=16.79^{***}$
カ 自分は世の中から取り残されているという感じ	42.1	36.5	37.3	$\chi^2(2)=16.92^{***}$
キ 自分だけが悪く思われているという感じ	68.5	60.4	54.6	$\chi^2(2)=99.65^{***}$
ク 自分は意志が弱いという感じ	80.9	75.3	72.6	$\chi^2(2)=45.58^{***}$
ケ 自分がものごとに打ち込んでいるという感じ	60.0	65.9	70.4	$\chi^2(2)=59.54^{***}$
コ 自分は頼りにされているという感じ	61.7	60.8	63.8	$\chi^2(2)=5.00^*$
サ 自分の努力がだんだん実ってきているという感じ	53.3	59.5	61.2	$\chi^2(2)=33.06^{***}$
シ 世の中の人々は互いに助け合っているという感じ	58.0	62.0	66.3	$\chi^2(2)=35.78^{***}$

注 数値は、「よくある」及び「ときどきある」の比率を合計したものである。

各項目の回答の経年比較では、「世の中には自分しか信じるものがないという感じ」($\chi^2(2)=77.30^{***}$),「世の中は結局金だけが頼りだという感じ」($\chi^2(2)=98.81^{***}$),「心のあたたまる思いが少ないという感じ」($\chi^2(2)=121.83^{***}$),「自分だけが悪く思われている感じ」($\chi^2(2)=99.65^{***}$),「自分は意志が弱いという感じ」($\chi^2(2)=45.58^{***}$)において,「ある」の比率が3回の調査で次第に低下を示し, χ^2 値もそれぞれ有意であった。劣等感や疎外感等が弱まりつつあることがうかがわれる。

他方,「自分がものごとに打ち込んでいるという感じ」($\chi^2(2)=59.54^{***}$),「自分の努力がだんだん実ってきているという感じ」($\chi^2(2)=33.06^{***}$),「世の中の人々は互いに助け合っているという感じ」($\chi^2(2)=35.78^{***}$)において,「ある」の比率が3回の調査で次第に上昇傾向を示し, χ^2 値もそれぞれ有意であった。自己効力感が強まりつつあることがうかがわれる。

そのほかにも経年比較において χ^2 値が有意であった項目があるが,多くが10年調査において2年調査よりも比率が低下した後,今回調査で比率が上昇したものであり,一貫した傾向はうかがわれなかった。

(2) 非行性による比較

今回調査において,対人感情に関する回答と少年鑑別所入所歴との間のクロス集計によって, χ^2 値が有意となった項目は,図 2 - 9 - 2 のとおりである。

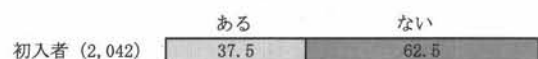
再入者の方が初入者よりも「ある」とする者の比率が高かった項目は,「世の中には自分しか信じるものがないという感じ」,「心のあたたまる思いが少ないという感じ」,「自分は世の中から取り残されてい

図 2-9-2 対人感情（非行性による比較）

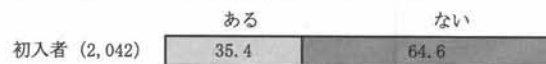
ア 世の中には自分しか信じるものがないという感じ

[$\chi^2(1)=4.50^*$]

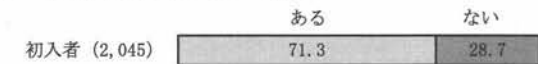
ウ 心のあたたま思いが少ないという感じ

[$\chi^2(1)=13.10^{***}$]

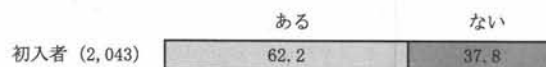
カ 自分は世の中から取り残されているという感じ

[$\chi^2(1)=10.89^{**}$]

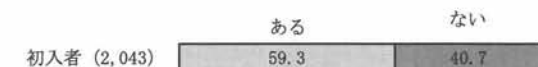
ク 自分は意志が弱いという感じ

[$\chi^2(1)=5.85^*$]

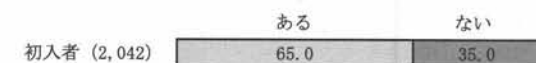
コ 自分は頼りにされているという感じ

[$\chi^2(1)=7.39^*$]

サ 自分の努力がだんだん実ってきているという感じ

[$\chi^2(1)=10.08^{**}$]

シ 世の中の人々は互いに助け合っているという感じ

[$\chi^2(1)=5.03^*$]

注 () 内は、回答者数である。

るという感じ」、「自分は意志が弱いという感じ」、「自分は頼りにされているという感じ」、「自分の努力がだんだん実ってきているという感じ」、「世の中の人々は互いに助け合っているという感じ」であり、初入者の方が再入者よりも「ある」とする者の比率が高い項目はなかった。

再入者の方が初入者と比較して、不信感、劣等感を強く抱いている反面、自分が必要とされている、努力が実っている、人は助け合っているという自己効力感も再入者の方が初入者よりも高い比率を示すという結果となっている。

10 同世代の者に対する見方

あなたは、あなたと同じくらいの年の人について、どう思いますか。(Q16)

- ア 今、この場が楽しければそれでよいと思っている人
- イ 気に入らないことがあると、カッとしたり、落ち込んだりしやすい人
- ウ いやなことがあっても、すぐ忘れようとする人
- エ ほかにの人にどう思われているか、気になる人
- オ 大切なことであっても、まじめに考えずにごまかしてしまう人
- カ 自分がよければ、少しくらい人に迷惑をかけてもかまわないと思っている人
- キ いつもだれかと一緒にいたいと思っている人
- ク 悪いことだと思っても、仲間と一緒にになるとやってしまう人
- ケ 超能力や占いなどを信じる人

(選択肢)

- 1 多い 2 やや多い 3 どちらともいえない 4 やや少ない 5 少ない

(1) 経年比較

この質問は、10年調査で新たに追加されたものであり、経年比較は、10年調査と今回調査の間で行う。同世代の者に対する見方に関する各項目の回答を、「多い」（「多い」及び「やや多い」の合計。以下同じ。）、「どちらともいえない」、「少ない」（「少ない」及び「やや少ない」の合計。以下同じ。）の3カテゴリーに統合し、「多い」と回答した比率を比較した。同世代の者に対する見方について、「多い」と回答した比率が上位5番目までの経年比較は、表2-10-1のとおりである。

いずれの調査でも1位は、「いつもだれかと一緒にいたいと思っている人」であり、次いで、「今、この場が楽しければそれでよいと思っている人」であった。10年調査で3位であった「悪いことだと思っても、仲間と一緒にになるとやってしまう人」が今回調査で4位となり、10年調査で4位であった「気に入らないことがあると、カッとしたり、落ち込んだりしやすい人」が今回調査では3位と上昇している。

同世代の者に対しては、群れたがる者やその場だけを楽しもうという者が多いという認知をしていることがうかがわれ、そうした認知に大きな変化は見られないと考えられる。

表2-10-1 同世代の者に対する見方（経年比較）

区 分	1 位	2 位	3 位	4 位	5 位
10年調査	いつもだれかと一緒にいたいと思っている人	今、この場が楽しければそれでよいと思っている人	悪いことだと思っても、仲間と一緒にになるとやってしまう人	気に入らないことがあると、カッとしたり、落ち込んだりしやすい人	ほかにの人にどう思われているか、気になる人
	78.8	75.3	73.1	66.1	58.2
17年調査	いつもだれかと一緒にいたいと思っている人	今、この場が楽しければそれでよいと思っている人	気に入らないことがあると、カッとしたり、落ち込んだりしやすい人	悪いことだと思っても、仲間と一緒にになるとやってしまう人	ほかにの人にどう思われているか、気になる人
	82.3	76.0	71.1	69.4	59.1

注 数値は、「多い」及び「やや多い」の比率を合計したものである。

(2) 非行性による比較

今回調査において、同世代の者に対する見方に関する回答と少年鑑別所入所歴との間のクロス集計によって、 χ^2 値が有意となった項目は、「いやなことがあっても、すぐ忘れようとする人」のみであった($\chi^2(2)=7.84^*$)。再入者の方が初入者よりも、同世代の者をいやなことから目をそらしがちであると認知しやすいことがうかがわれる。

11 非行に対する意見

非行あるいは非行少年について、お聞きします。(Q17)

ア あなたは、少年が非行に走るのには、どこに主な原因があると思いますか。

1 少年自身 2 家族(親) 3 友達・仲間 4 その他

イ あなたは、非行少年の扱いについて、次のどちらの意見に賛成ですか。

1 厳しく罰する 2 あたたく指導する

(1) 経年比較

少年が非行に走る原因についての経年比較は、図2-11-1①のとおりである。

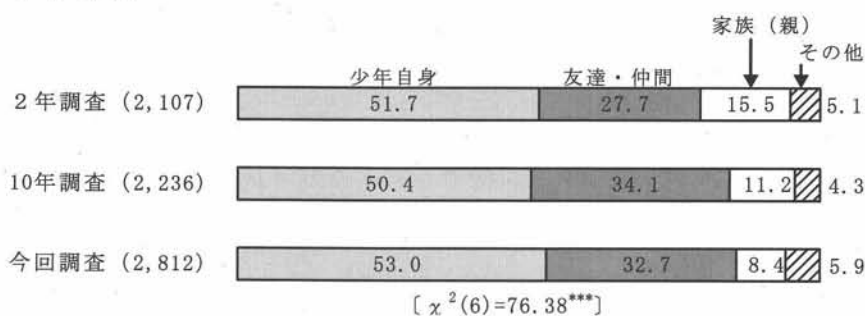
いずれの調査でも、少年が非行に走る原因と選択した比率は、「少年自身」が最も高く、次いで、「友達・仲間」、「家族(親)」、「その他」の順であった。クロス集計の結果、 χ^2 値が有意であった($\chi^2(6)=76.38^{***}$)。非行の原因として「家族(親)」とする比率が低下傾向であることがうかがわれる。

非行少年の扱いについての経年比較は、図2-11-1②のとおりである。

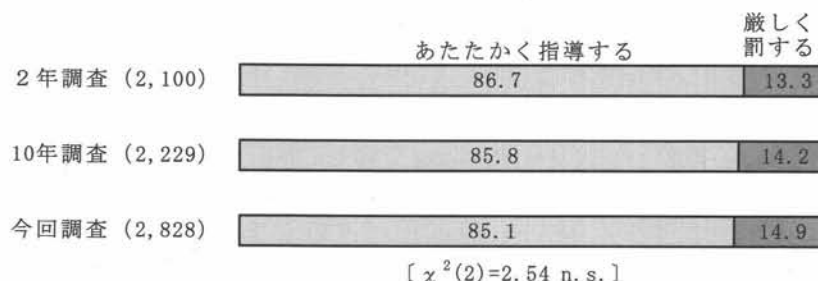
いずれの調査でも、非行少年の扱いについて賛成と選択した比率は、「あたたく指導する」がかなり高く、「厳しく罰する」は低かった。クロス集計の結果、 χ^2 値は有意ではなかった($\chi^2(2)=2.54 \text{ n.s.}$)。

図2-11-1 非行に対する意見(経年比較)

① 非行の原因



② 非行少年の扱い



注 () 内は、回答者数である。

(2) 非行性による比較

少年が非行に走る原因と選択した各項目の比率を少年鑑別所入所歴別に統計的に検定したところ、有意差は、認められなかった ($\chi^2(3)=.53$ n.s.)。

非行少年の扱いに対する回答の比率を少年鑑別所入所歴別に統計的に検定したところ、有意差は、認められなかった ($\chi^2(3)=2.85$ n.s.)。

非行に対する意見については、初入者及び再入者の間で特に認識の違いは認められなかった。

12 心のブレーキ

もし、あなたが法律で禁じられているような「悪い」ことをしようと思ったとき、あなたを思いとどまらせる心のブレーキになるのは次のどれですか。(Q18)

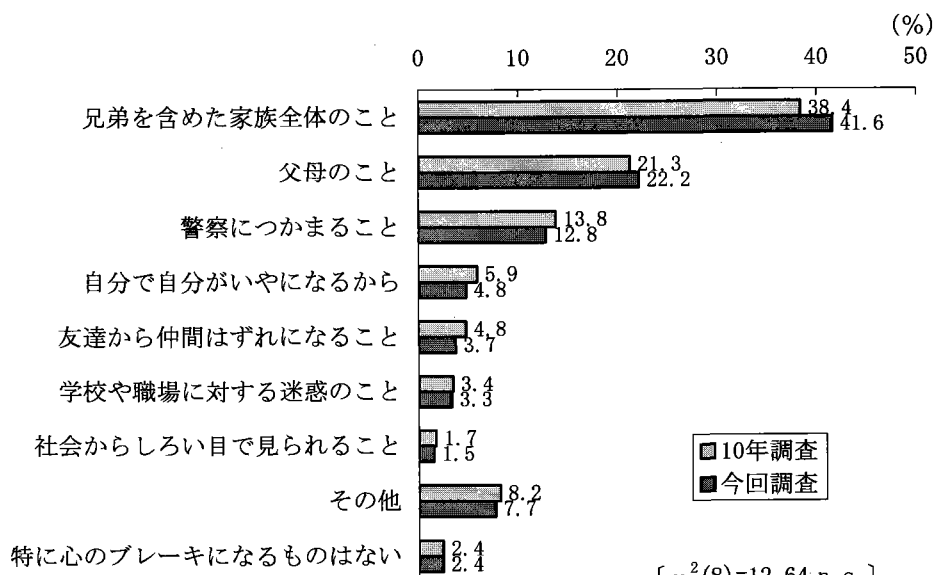
- | | |
|--------------------|------------------|
| 1 父母のこと | 2 兄弟を含めた家族全体のこと |
| 3 友達から仲間はずれになること | 4 学校や職場に対する迷惑のこと |
| 5 社会からしろい目で見られること | 6 警察につかまること |
| 7 自分で自分がいやになるから | 8 その他 |
| 9 特に心のブレーキになるものはない | |

(1) 経年比較

この質問は、10年調査で新たに追加されたものであり、10年調査と今回調査の間の経年比較は、図2-12-1でとおりである。

いずれの調査でも、心のブレーキと選択した比率は、「兄弟を含めた家族全体のこと」が最も高く、次いで、「父母のこと」、「警察につかまること」の順であった。クロス集計の結果、 χ^2 値は有意ではなかった ($\chi^2(8)=12.64$ n.s.)。

図2-12-1 心のブレーキ（経年比較）



注 項目に該当する者の比率である。

(2) 非行性による比較

初入者及び再入者ともに、心のブレーキと選択した比率は、「兄弟を含めた家族全体のこと」が最も高く、次いで、「父母のこと」、「警察につかまること」の順であった。「その他」を選択した比率が、再入者が11.3%，初入者が6.3%で、再入者の方が高かった。交友関係に関する回答結果などを考慮すると、再入者の方が「その他」として恋人などを心のブレーキと考えているのではないかと思われる。

13 これからの生活で大切なこと

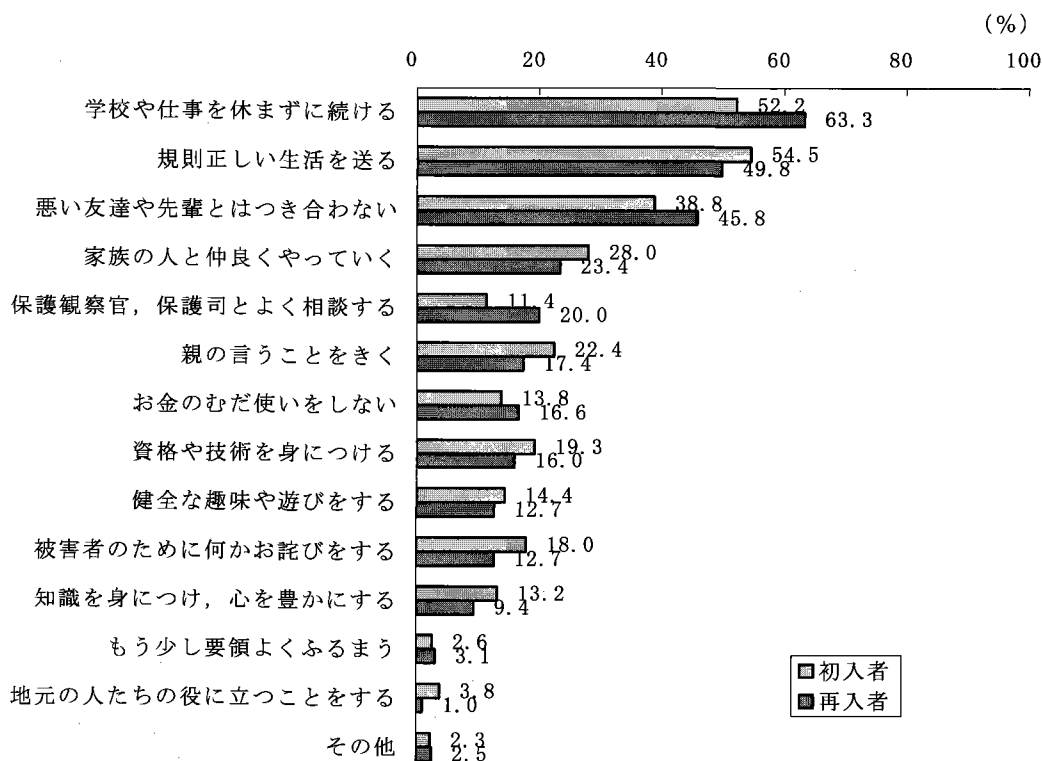
これからの生活で、あなたにとって大切と思えるもの3つを選んでください。(Q19)

- | | |
|---------------------|---------------------|
| 1 規則正しい生活を送る | 2 お金のむだ使いをしない |
| 3 健全な趣味や遊びをする | 4 学校や仕事を休まずに続ける |
| 5 資格や技術を身につける | 6 知識を身につけ、心を豊かにする |
| 7 親の言うことをきく | 8 家族の人と仲良くやっていく |
| 9 悪い友達や先輩とはつき合わない | 10 被害者のために何かお詫びをする |
| 11 地元の人たちの役に立つことをする | 12 保護観察官、保護司とよく相談する |
| 13 もう少し要領よくふるまう | 14 その他 |

この質問は、今回調査で新たに追加したものであることから、非行性による比較のみを行う。

これからの生活で大切なことに関する各項目の回答の少年鑑別所入所歴別の比率は、図2-13-1のとおりである。

図2-13-1 これからの生活で大切なこと（非行性による比較）



注 1 項目に該当する者の比率である。

2 最大三つまでの複数回答である。

今回調査では、これからの生活で大切なことと選択した比率は、「学校や仕事を休まずに続ける」が55.4%と最も高く、次いで、「規則正しい生活を送る」53.1%、「悪い友達や先輩とは付き合わない」40.8%の順であった。

初入者と再入者を比較すると、初入者の方が「規則正しい生活を送る」、「家族の人と仲良くやっていく」、「親の言うことを聞く」などが高く、再入者の方が「学校や仕事を休まずに続ける」、「悪い友達や先輩とは付き合わない」、「保護観察官、保護司とよく相談する」が高かった。

14 自分の生き方に対する満足度

あなたは、今の自分の生き方に、どのくらい満足していますか。(Q20)

- 1 満足
- 2 やや満足
- 3 どちらとも言えない
- 4 やや不満
- 5 不満

(1) 経年比較

自分の生き方に対してどのくらい満足しているかに関する経年比較は、図2-14-1のとおりである。

自分の生き方に対する満足度を、「満足」、「どちらとも言えない」、「不満」の3カテゴリーに統合し、これまでの3回の調査結果の間でクロス集計を行ったところ、 χ^2 値は有意であった($\chi^2(4)=27.77^{***}$)。自分の生き方に対して「満足」とする者の比率は、2年調査が37.8%で、10年調査では34.9%とやや低下したが、今回調査では38.7%とやや上昇しており、一貫した傾向はうかがわれない。

図2-14-1 自分の生き方に対する満足度(経年比較)

	満足	どちらとも言えない	不満
2年調査(2,111)	37.8	31.2	31.0
10年調査(2,238)	34.9	27.3	37.8
今回調査(2,847)	38.7	27.4	33.9

[$\chi^2(4)=27.77^{***}$]

注 1 「満足」は、「満足」及び「やや満足」を合計したものであり、「不満」は、「不満」及び「やや不満」を合計したものである。

2 ()内は、回答者数である。

(2) 非行性による比較

自分の生き方に対してどのくらい満足しているかに関する少年鑑別所入所歴別の比較は、図2-14-2のとおりである。初入者の「満足」とする者の比率が40.8%、再入者の「満足」とする者の比率が33.5%であり、初入者の方が「満足」とする者の比率が高く、 χ^2 値も有意であった($\chi^2(2)=16.58^{***}$)。

図 2-14-2 自分の生き方に対する満足度（非行性による比較）

	満足	どちらとも言えない	不満
初入者（2,031）	40.8	27.3	31.9
再入者（816）	33.5	27.7	38.8

$$[\chi^2(2)=16.58^{***}]$$

注 1 「満足」は、「満足」及び「やや満足」を合計したものであり、「不満」は、「不満」及び「やや不満」を合計したものである。

2 （ ）内は、回答者数である。

第3 調査結果の総合的統計分析

調査結果の基礎的統計分析においては、質問項目ごとに単純集計、経年比較、非行性による比較を行い、非行少年の意識の特徴及びその変化を探ってきた。以下の調査結果の総合的統計分析では、非行少年の意識の実態により深く迫るため、非行少年の生活満足度、対人感情及び対人態度の構造並びにそれらの関連について、多変量解析を用いた分析を試みる。

法務総合研究所では、2年調査の結果に対して、確認的因子分析等を実施し、非行少年の対人感情として不信感、劣等感及び無力感の3因子を抽出して、その構造等について検討している⁷。今回は、非行少年の対人感情の構造だけではなく、生活満足度及び対人態度の構造についても分析を行い、それらの関連について検討する。具体的な分析目的をまとめると、次のとおりである。

- ① 生活満足度、対人感情及び対人態度の内容がどのような因子によって構成されているかを因子分析を用いて検討する。
- ② 生活満足度、対人感情及び対人態度の間にどのような関連があるかを共分散構造分析を用いて検討する。

1 生活満足度の因子分析

生活満足度に関する項目（家庭生活に対する満足度（Q1）、友人関係に対する満足度（Q4）、社会に対する満足度（Q12）、自分の生き方に対する満足度（Q20））に対する回答結果に因子分析を行い、生活満足度を構成している因子を抽出する。

生活満足度に関する項目では、5段階評定で回答することを求めている。それぞれの項目に対する回答について、「満足」を5点、「やや満足」を4点、「どちらともいえない」を3点、「やや不満」を2点、「不満」を1点として、家庭生活に対する満足度、友人関係に対する満足度、社会に対する満足度、自分の生き方に対する満足度を表すものとした。各項目の平均値及び標準偏差は、表3-1-1のとおりである。

各項目の回答の分布を見ると、家庭生活に対する満足度及び友人関係に対する満足度の回答が、「満足」の方向にやや偏っているが、分析から除くほどではないと判断し、以降の分析にも含めることとする。

表3-1-1 生活満足度に関する項目の
基礎統計量

項 目	平 均 値	標 準 偏 差
家 庭 生 活	4.04	1.15
友 人 関 係	4.14	1.04
社 会	3.13	1.06
自 分 の 生 き 方	3.05	1.25

注 無回答は除く。

今回調査の生活満足度に関する項目の回答結果に対して、最尤法を用いた因子分析を行った。各項目間の相関係数（ピアソン）は、表3-1-2のとおりである。

7 坪内宏介ほか「非行少年の生活・価値観に関する研究（第2報告）」、法務総合研究所研究部紀要35、1992、187-202

表 3-1-2 生活満足度に関する項目間の相関係数

項 目	家 庭 生 活	友 人 関 係	社 会	自分の生き方
家 庭 生 活	1.00	0.19	0.33	0.29
友 人 関 係		1.00	0.18	0.25
社 会			1.00	0.27
自 分 の 生 き 方				1.00

注 無回答は除く。

個有値の減少傾向を見ると、第1因子が1.76、第2因子が.86、第3因子が.71、第4因子が.67となったことから、1因子のみを抽出した。生活満足度の因子分析結果は、表3-1-3のとおりである。

すなわち、生活満足度は、満足しているか、満足していないかの1因子によって構成され则认为られる。

表 3-1-3 生活満足度の因子分析結果

項 目	因 子
家 庭 生 活	0.56
友 人 関 係	0.54
社 会	0.53
自 分 の 生 き 方	0.38
寄 与 率 (%)	25.82

注 無回答は除く。

2 対人感情の因子分析

今回調査の対人感情に関する項目(Q15)に対する回答結果に因子分析を行い、対人感情を構成している因子を抽出する。

対人感情に関する質問では、計12項目について4段階評定で回答することを求めている。それぞれの項目に対する回答について、「よくある」を4点、「ときどきある」を3点、「あまりない」を2点、「まったくない」を1点としたが、坪内ら(1992)において「無力感」に含まれた項目等(「自分の努力がだんだん実ってきている感じ」、「自分がものごとに打ち込んでいるという感じ」、「自分は頼りにされているという感じ」、「世の中の人々は互いに助け合っているという感じ」)については、因子の意味との関連から他の項目と異なり、「逆転項目」として、「よくある」を1点、「ときどきある」を2点、「あまりない」を3点、「まったくない」を4点とした。各項目ごとの平均値及び標準偏差は、表3-2-1のとおりである。

今回調査の対人感情に関する項目の回答結果に対して、最尤法・斜交プロマックス回転による因子分析をそれぞれ実施し、固有値の減少等を考慮の上、3因子を抽出した。因子分析を実施した結果は、表3-2-2のとおりである。

第1因子では、「自分は何をやってもだめな人間だという感じ」、「自分は世の中から取り残されているという感じ」、「自分の性格がいやになるという感じ」などが高い因子負荷量を示したことから、「劣等感」因子と名付けた。第2因子では、「自分の努力がだんだん実ってきているという感じ(逆転)」、「自分がものごとに打ち込んでいるという感じ(逆転)」、「自分は頼りにされているという感じ(逆転)」などが高い因子負荷量を示したことから、「無力感」因子と名付けた。第3因子では、「世の中は結局金だけが

頼りだという感じ」,「世の中には自分しか信じるものがないという感じ」,「心のあたたま思いが少ないという感じ」などが高い因子負荷量を示したことから,「不信感」因子と名付けた。

すなわち,対人感情は,「劣等感」,「無力感」及び「不信感」の3因子から構成され则认为られる。

表 3 - 2 - 1 対人感情に関する項目の基礎統計量

項	目	平均値	標準偏差
Q15-ア	自分しか信じるものがない	2.10	0.88
Q15-イ	世の中は金だけが頼り	2.66	0.95
Q15-ウ	心のあたたま思いが少ない	2.32	0.85
Q15-エ	自分の性格がいやになる	2.89	0.87
Q15-オ	自分は何をやってもだめ	2.53	0.89
Q15-カ	世の中から取り残されている	2.25	0.90
Q15-キ	自分だけが悪く思われている	2.58	0.92
Q15-ク	意志が弱い	2.95	0.95
Q15-ケ	ものごとに打ち込んでいる (逆転)	2.09	0.82
Q15-コ	頼りにされている (逆転)	2.31	0.78
Q15-サ	努力が実ってきている (逆転)	2.30	0.85
Q15-シ	人々は互いに助け合っている (逆転)	2.13	0.89

注 無回答は除く。

表 3 - 2 - 2 対人感情の因子分析結果

項 目		因 子		
		I	II	III
因子Ⅰ：劣等感				
Q15-オ	自分は何をやってもだめ	0.80	0.07	-0.07
Q15-カ	世の中から取り残されている	0.67	0.01	0.05
Q15-エ	自分の性格がいやになる	0.63	0.00	0.01
Q15-ク	意志が弱い	0.47	0.04	-0.06
Q15-キ	自分だけが悪く思われている	0.42	-0.07	0.24
因子Ⅱ：無力感				
Q15-サ	努力が実ってきている（逆転）	0.01	0.74	0.02
Q15-ケ	ものごとに打ち込んでいる（逆転）	0.01	0.57	-0.03
Q15-コ	頼りにされている（逆転）	0.14	0.52	-0.04
因子Ⅲ：不信感				
Q15-ア	自分しか信じるものがない	0.07	-0.06	0.62
Q15-イ	世の中は金だけが頼り	-0.62	0.02	0.60
Q15-ウ	心のあたたま思いが少ない	0.10	0.02	0.55
Q15-シ	人々は互いに助け合っている（逆転）	-0.15	0.32	0.32
因子間相関		I	II	III
I		1.00	0.34	0.52
II			1.00	0.34
III				1.00

注 無回答は除く。

3 対人態度の因子分析

今回調査の態度・価値観に関する質問 (Q14) のうち,対人態度に関連する項目を選んで因子分析を行

い、対人態度を構成している因子を抽出する。

態度・価値観に関する質問は、計19項目あるが、このうち対人態度に関連する10項目を選び、それぞれの項目に対する回答について、「賛成」を5点、「やや賛成」を4点、「どちらともいえない」を3点、「やや反対」を2点、「反対」を1点として、項目ごとの平均値及び標準偏差を見ると、表3-3-1のとおりである。

表3-3-1 対人態度に関する項目の基礎統計量

項 目	平 均 値	標準偏差
多数の意見には従うべき	2.91	1.18
ひょうきんにふるまう人が好き	3.71	1.09
目立たないようにする方がよい	2.58	1.15
場合によっては腕力に訴えてもよい	3.27	1.24
自分のしたいことをする方がよい	3.02	1.18
自分のやりたいことをやるにはルール破りも仕方ない	2.27	1.13
努力よりも要領よくふるまう方がよい	2.88	1.09
リーダーよりも人に従っていた方が気楽でよい	2.60	1.23
人のことは深入りしない方がよい	3.45	1.05
年上や目上の人には従うべき	3.34	1.13

注 無回答は除く。

今回調査の対人態度に関する項目の回答結果に対して、最尤法・斜交プロマックス回転による因子分析をそれぞれ行い、固有値の減少等を考慮の上、2因子を抽出した。二つの因子のどちらにも低い因子負荷量しか示さなかった2項目（「年上や目上の人には従うべきだ」、「人のことにはあまり深入りしない方がよい」）を除いて、再度、因子分析を行った結果は、表3-3-2のとおりである。

第1因子では、「自分のやりたいことをやりぬくためには、ルールを破るのも仕方がないことだ」、「世の中全体のことを考えるよりも、自分のしたいことをする方がよい」、「努力するよりも、要領よくふる

表3-3-2 対人態度の因子分析結果

項 目	因 子	
	I	II
因子I：自己優先的態度		
自分のやりたいことをやるにはルール破りも仕方ない	0.67	-0.07
自分のしたいことをする方がよい	0.58	0.03
場合によっては腕力に訴えてもよい	0.41	-0.05
努力よりも要領よくふるまう方がよい	0.39	0.20
ひょうきんにふるまう人が好き	0.37	-0.08
因子II：状況依存的態度		
目立たないようにする方がよい	-0.12	0.56
リーダーよりも人に従っていた方が気楽でよい	0.13	0.48
多数の意見には従うべき	-0.05	0.33
因子間相関	I	II
	1.00	0.19
		1.00

注 無回答は除く。

まう方がよい」などが高い因子負荷量を示したことから、「自己優先的態度」因子と名付けた。第2因子では、「まわりから何か言われないうに、目立たないようにする方がよい」、「リーダーになって苦労するよりは、人に従っていた方が気楽でいい」、「自分の意見とちがっていても多数の意見には従うべきだ」が高い因子負荷量を示したことから、「状況依存的態度」因子と名付けた。

すなわち、対人態度は、「自己優先的態度」及び「状況依存的態度」の2因子から構成され则认为られる。

4 生活満足度、対人感情及び対人態度の関連について

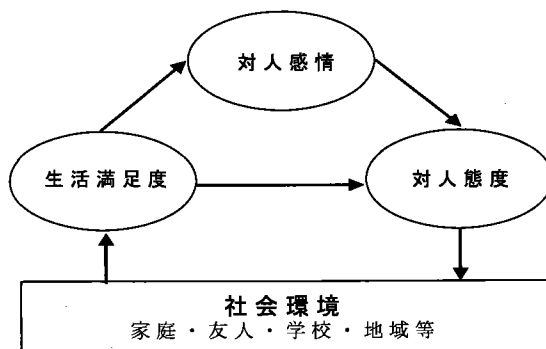
(1) 仮説的な因果モデル

生活満足度、対人感情及び対人態度の関連を包括的に検討するため、共分散構造分析を用いたモデル構成を試みる。因子分析で抽出した生活満足度、対人感情及び対人態度の各因子がどのように関連するかを探る。仮説的な因果モデルは、図3-4-1のとおりである。

この因果モデルでは、家庭や友人関係等の社会環境との交互作用によってもたらされる生活満足度の高低が対人感情に影響を与え、さらに、対人感情の変化は対人態度に影響を与えると仮定する。他方、生活満足度は対人感情に影響を与えるだけでなく、直接、対人態度の変化に影響を与えると仮定する。非行との関連で見れば、家庭や友人関係等での生活満足度の低下、すなわち不満の高まりは、負の対人感情を強め、さらに、負の対人感情の強まりは、偏った対人態度を強め、非行への接近を容易にさせることになると仮定する。他方、生活満足度の上昇は、自己満足的な傾向を強めるという意味で、偏った対人態度を強めるだろうと仮定する。

以下では、この因果モデルの構造の妥当性について検討する。

図3-4-1 仮説的な因果モデル



(2) 共分散構造分析による生活満足度、対人感情及び対人態度の関連の検討

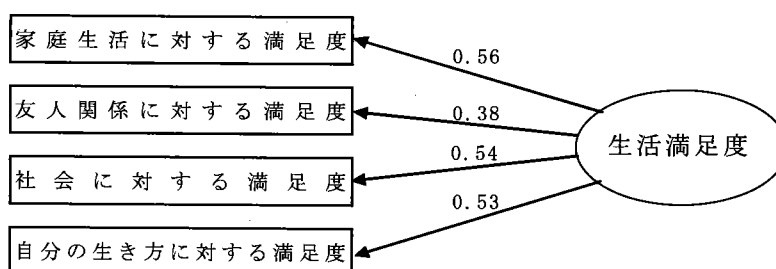
まず生活満足度、対人感情及び対人態度の潜在変数ごとに、観測変数を設定し、その適合度について検討する。共分散構造分析においては、統計パッケージソフト SPSS の Amos4.0を用いた。

生活満足度の潜在変数は、家庭生活に対する満足度、友人関係に対する満足度、社会に対する満足度及び自分の生き方に対する満足度の4項目の回答すべてを観測変数として構成した。

生活満足度のモデル図及び分析結果は、図3-4-2のとおりである。

各適合度指標の値は、適合度指標 (GFI) = .996, 修正適合度指標 (AGFI) = .980, 比較適合度指標 (CFI) = .979, 平均二乗誤差平方根 (RMSEA) = .059であり、モデルが十分にデータを説明していると判断した。各パス係数のうち、生活満足度から友人関係に対する満足度への値がやや低く、友人関係の満足度が全般的な満足度とはやや違った個別の要因によって変動しやすいのではないかとと思われる。

図 3-4-2 生活満足度のモデル図及び分析結果



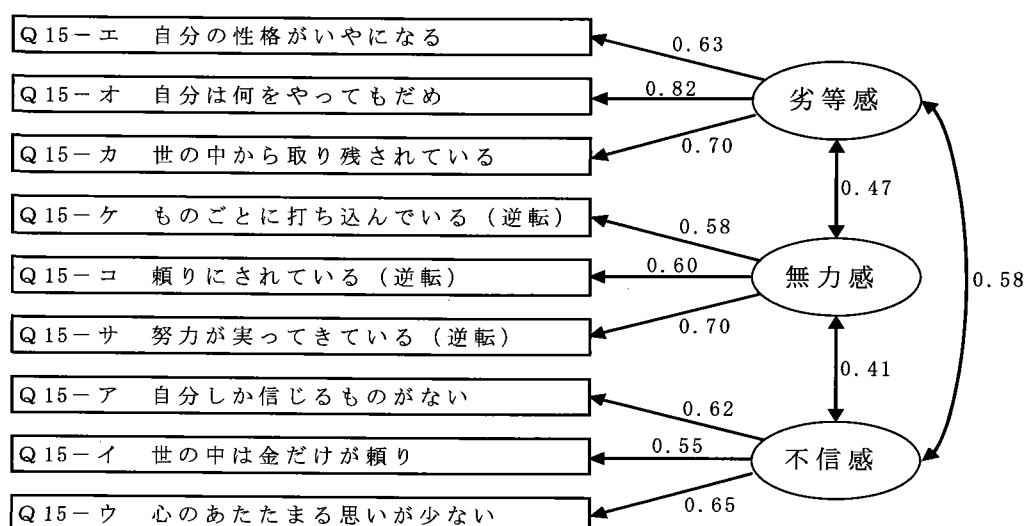
注 1 各適合度指標の値は、GFI=0.996, AGFI=0.980, CFI=0.979, RMSEA=0.059である。

2 分析数は、2,731人である。

対人感情に関するモデルの構成では、因子分析で因子負荷量が高かった項目の中から各因子3項目ずつを観測変数とした。対人感情のモデル図及び分析結果は、図 3-4-3 のとおりである。

各適合度指標の値は、GFI=.986, AGFI=.973, CFI=.970, RMSEA=.049であり、モデルが十分にデータを説明していると判断した。劣等感と不信感の相関係数が.58, 劣等感と無力感の相関係数が.47, 無力感と不信感の相関係数が.41であり、劣等感と不信感の関連と比較して、無力感と他の2つの因子との関連はやや低い。

図 3-4-3 対人感情のモデル図及び分析結果



注 1 各適合度指標の値は、GFI=0.986, AGFI=0.973, CFI=0.970, RMSEA=0.049である。

2 分析数は、2,731人である。

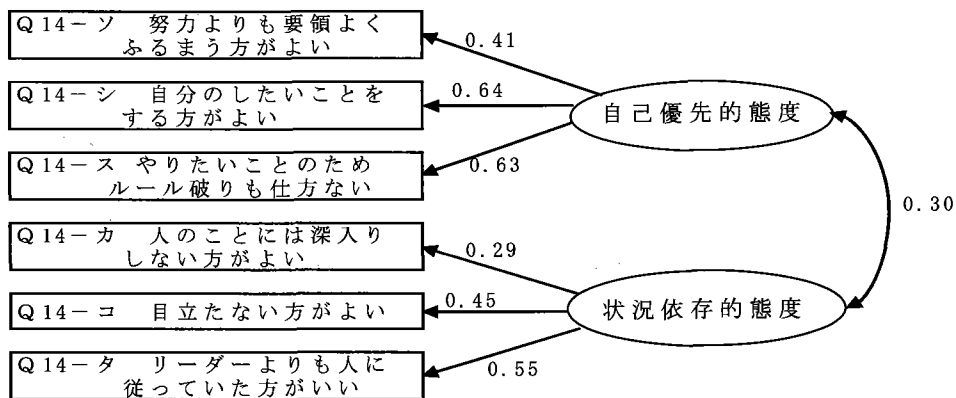
対人態度に関するモデルの構成では、因子分析で因子負荷量が高かった項目の中から各因子3項目ずつを観測変数とした。対人態度のモデル図及び分析結果は、図 3-4-4 のとおりである。

各適合度指標の値は、GFI=.982, AGFI=.952, CFI=.878, RMSEA=.083であり、モデルがデータを説明していると判断した。自己優先的態度と状況依存的態度の相関係数は、.30と正の関係であった。

生活満足度、対人感情及び対人態度の各潜在変数ごとに適合度等を検討したところ、いずれも良好な適合度を示したことから、次に、図 3-4-1 で示した仮説的な因果モデルによって、各潜在変数間の関連を検討する。生活満足度、対人感情及び対人態度の関連性に対する共分散構造分析による結果は、図 3-4-5 のとおりである。

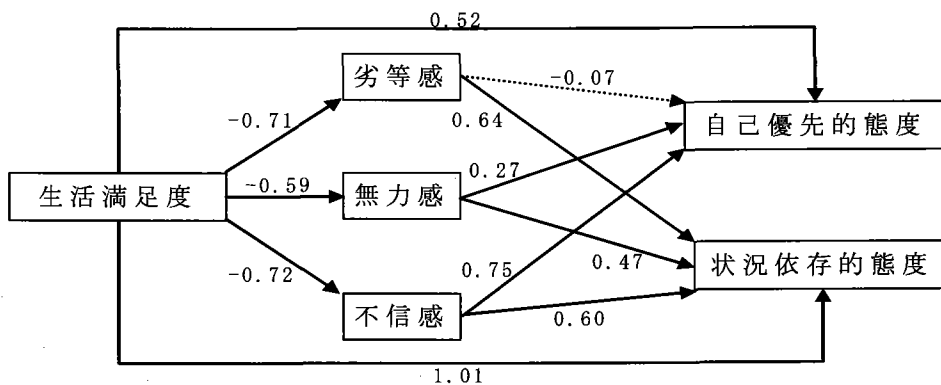
各適合度指標の値は、GFI=.953, AGFI=.936, CFI=.886, RMSEA=.053であり、モデルが十分

図 3-4-4 対人態度のモデル図及び分析結果



- 注 1 各適合度指標の値は、GFI=0.982, AGFI=0.952, CFI=0.878, RMSEA=0.083
である。
- 2 分析数は、2,731人である。

図 3-4-5 生活満足度、対人感情、対人態度の関連性



- 注 1 各適合度指標の値は、GFI=0.953, AGFI=0.936, CFI=0.886, RMSEA=0.053
である。
- 2 分析数は、2,731人である。
- 3 「劣等感」から「自己優先的態度」への破線は、パス係数が有意でないことを示す。

にデータを説明していると判断した。

生活満足度から対人感情へのパスを検討すると、生活満足度の高低は、負の対人感情である劣等感、無力感、不信感のすべてに対して、マイナスの方向で有意な影響を及ぼしている。すなわち、生活満足度が上昇すれば、負の対人感情は低下し、生活満足度が低下すれば、負の対人感情は上昇しやすいことがうかがわれる。特に、生活満足度の高低は、劣等感及び不信感にかなり強い影響を与えやすい。生活満足度が無力感に及ぼす影響度は、劣等感及び不信感に及ぼす影響度よりは若干低い。

対人感情から対人態度へのパスを検討すると、劣等感の強まりは、状況依存的態度を強める。すなわち、劣等感が強いほど周囲に追従的な傾向が強まる。劣等感から自己優先的態度へのパスは、有意にはならず、劣等感の高低が自己優先的態度の高低に与える影響は、ほとんどうかがわれない。

無力感の強まりは、状況依存的態度を強めやすく、同時に自己優先的態度も若干強める。すなわち、無力感が強まると、成り行き任せにしようとする状況依存的傾向が強まるが、同時に投げやりな気持ちから自己優先的態度を強めるのではないかと思われる。ただし、無力感が対人態度の形成に及ぼす影響度は、劣等感及び不信感と比較するとやや低い。

不信感の強まりは、自己優先的態度をかなり強めるが、同時に状況依存的態度も若干強める。すなわち、不信感が強いほど、周囲にかかわりなく自分の欲求を充足しようとする傾向が強まるが、同時に自

分の責任を回避するために成り行きに任せるという状況追従的傾向を強めやすいことがうかがわれる。

仮説的な因果モデルでは、生活満足度が対人感情の高低に影響を与えるだけでなく、直接的に対人態度に影響を与えると仮定している。生活満足度の変動は、状況依存的態度にかなり影響を与え、自己優先的態度にもやや影響を与えている。すなわち、生活満足度が上昇すれば、状況依存的態度をかなり強めるとともに、同時に自己優先的態度もやや強めることがうかがわれる。

以上の生活満足度、対人感情及び対人態度の関連性に対する共分散構造分析の結果をまとめると、図 3-4-1 で示した仮説的な因果モデルの妥当性が確認された。すなわち、生活満足度の高低が対人感情の悪化あるいは好転に影響を及ぼし、対人感情の悪化あるいは好転によって対人態度が影響を受ける。また、生活満足度の高低は、直接的に対人態度に有意な影響を与えている。非行との関連で見れば、生活満足度が低下すれば、対人感情が悪化し、偏った対人態度を強めやすく、それによって非行に走るリスクが高まるであろう。また、生活満足度の上昇は、偏った対人態度、特に、状況依存的態度を強める、といった因果関係が確認された。生活満足度の上昇は、対人感情の悪化あるいは好転に影響を与えて、さらに、対人態度に影響を及ぼすときは、対人感情の好転をもたらすことによって、偏った対人態度を弱める方向に影響を及ぼすが、直接、対人態度に影響を及ぼすときは、偏った対人態度を強める方向に影響を及ぼすという相反する影響の及ぼし方が観測された。対人感情の好転をもたらさずに、生活満足度だけが上昇した場合、自己満足的な気分を強め、無責任な状況依存的態度を強めやすいと考えられる。ただし、生活満足度から対人態度への標準化総合効果を見ると、自己優先的態度へ-.173、状況依存的態度へ-.158であり、生活満足度の上昇は、総合的には偏った対人態度をわずかに弱める方向に影響を及ぼしやすいことがうかがわれる。

基礎的統計分析では、非行少年の生活満足度の上昇、対人感情の好転、自己優先的態度の弱まり等が認められており、非行少年の全体的な意識としては、上記の因果モデルを当てはめれば、生活満足度の上昇が対人感情の好転をもたらす、それによって自己優先的態度の弱まりが見られるようになっていると考えることもできる。

しかし、生活満足度の上昇は、一方で、偏った対人態度を強める方向に影響を及ぼすことにも注意が必要である。基礎的統計分析では、自己優先的態度は弱まっているが、状況依存的態度は強まる傾向にあることがうかがわれ、今後、対人感情の好転を伴わずに生活満足度が上昇した場合、無責任で人任せな態度が強まるおそれがある。

さらに、生活満足度の上昇や対人感情の好転についても、その中身について、詳細に検討する必要がある。家庭生活に対する満足度は上昇していたものの、家庭生活に対する満足度の基準として、家庭において金銭的な満足が得られるかどうかなどが優先度を上げてきていることがうかがわれた。また、友人関係でも、当たり障りなくそばにいて、寂しさを紛らわせてくれる友人を求めるようになっていることがうかがわれた。満足度が上昇しているといっても、家庭や友人に求めるものが変化し、親の側の許容的な態度等の変化もあり、欲求が容易に満たされやすくなっているために満足度が上昇しているのかもしれない。あるいは、満足度が上昇しているとしても、そこに求めるもののレベルが低下しているのでは、それを楽観的に評価することはできないと思われる。

第4 まとめ

基礎的統計分析及び総合的統計分析において見てきたとおり、非行少年の家族関係、友人関係、自己意識等には、この15年間で様々な変化が認められる。ここでは、分析結果に現れた特徴的な点を取り上げ、まとめとしたい。

(1) 家庭生活に対する満足度は、次第に上昇しており、7割以上の者が「満足」と回答していた。家族との関係について、「家族との話を楽しいと感じる」、「自分の将来について、親に話したいと思う」とする者の比率が上昇しているし、親に対して、「気軽に話ができる」、「悩みを打ち明けられる」などとする者の比率も上昇しており、父親や母親への親和的感情が高まり、心理的距離が縮まりつつあることがうかがわれる。

他方、家庭生活に対して「不満」とする者は、1割程度であったが、不満とする理由で最も多かったのは、「親が自分を理解してくれない」であった。親の無理解に対する不満は、2年調査、10年調査及び今回調査のいずれでも不満理由の第1位であった。家庭生活への不満理由として特徴的なのは、2年調査では不満理由の上位5位内にも入っていなかった「家庭に収入が少ない」が、10年調査では第3位に、今回調査では第2位の不満理由となっていることである。経済的な豊かさが広がる中、最近の経済状況等の影響で、経済的に苦しい家庭環境にいる非行少年にとって、金銭面での不遇さをより強く実感するようになり、それが家庭生活への金銭的な不満へとつながっていることがうかがわれる。

(2) 友人関係に対する満足度も、次第に上昇してきており、今回調査では、8割近くの者が「満足」と回答していた。友人関係では、「悲しいことがあったら話を聞いてもらおう」、「お互いの悪いところは悪いと言い合える」、「何も言わなくても、分かり合えている」などの選択率が高く、友人に相談相手や理解者としての役割を期待していることがうかがわれる。他方、大事な友人については、「いつもそばにいて相手になってくれる人」、「興味や趣味が似ている人」を選択する比率が上昇傾向にあることから、当たり障りなく楽しみを共有でき、寂しさを紛らわす相手になってくれる友人を求める傾向が徐々に強まっていることがうかがわれる。

友人関係に対する満足度では、非行性による有意差が認められた。初入者と比較して再入者の方が満足度が低く、「相手にけっこう気をつかっている」、「あまり深刻な相談はしない」など、友人関係に距離を置いていることがうかがわれる。他方、「悩みを打ち明けられる人」については、初入者と比較して再入者の方が異性の友達・恋人を選択した比率が高く、非行性の進んだ者ほど、異性関係に親密な相手を求めようとしていることがうかがわれる。

同世代の者に対しては、「いつもだれかと一緒にいたいと思っている人」や「今、この場が楽しければそれでよいと思っている人」が多いと認知しており、そうした同世代の者に対する認知に経年での変化はほとんど認められなかった。

(3) 今回調査における社会に対する満足度は、33.9%と低く、経年比較でもほぼ横ばいで目立った変化は認められなかった。不満とする理由は、「金持ちと貧乏な人との差がありすぎる」、「若者の意見は反映されない」などであり、金銭面での格差を不満とする者が目立った。

人の暮らし方に対する質問に対しても、「金や名誉を考えずに、自分の趣味に合った暮らし方をする」の比率が低下し、「いっしょうけんめい働き、倹約して金持ちになる」が上昇しており、金銭面での成功を第一に考える者が増えてきていることがうかがわれる。そうした金銭面での成功を志向する者は、再入者の方が初入者よりも多く、非行性の進んだ者の方が金銭面での成功を第一に考えやすいのに対し、

非行性の進んでいない者は現状維持的な志向が強いことがうかがわれる。

(4) 少年が非行に走る原因と回答した比率は、「少年自身」が最も高く、次いで、「友達・仲間」、「家族（親）」、「その他」の順であった。家庭生活における満足度の上昇を背景として、非行の原因として、「家族（親）」と回答する比率が低下傾向であることがうかがわれる。

「悪い」ことをしようと思ったときの「心のブレーキ」について、「兄弟を含めた家族全体のこと」が最も回答の比率が高く、次いで、「父母のこと」、「警察につかまること」の順であった。

これらの結果からは、非行少年は、親や家族を非行の原因とはあまり考えておらず、むしろ非行に走ることを食い止める「心のブレーキ」になっていると認知していることがうかがわれる。

(5) 今回調査では、新たに中学生活及び地域社会に関する質問を追加して実施した。

中学生活について、非行性による相違が見られた。再入者の方が初入者よりも、授業中にじっとしていられなかった、登校をつらく感じていた者の比率が高く、他方、初入者の方が再入者よりも学校の先生を尊敬していたとする者の比率が高かった。非行性の進んでいる者の方が中学校生活当時から不適応感を強く抱きがちであったことがうかがわれる。

地域社会に対する認知については、再入者の方が初入者よりも、地域社会における性的なものや違法なものへの接近が容易であると認知しがちであり、他方、初入者の方が再入者よりも、地域社会の人々が身近なトラブルに積極的に介入してくれると認知していた。非行性の進んでいる者の方が、地域社会の規範がよりルーズであると認知しやすいのに対し、非行性の進んでいない者の方が地域社会の人々に信頼感を抱く傾向が強いことがうかがわれる。

(6) 調査結果の総合的統計分析では、非行少年の生活満足度、対人感情及び対人態度の構造について、今回調査の結果を検討した。

対人感情の因子としては、劣等感、無力感及び不信感の三つを、対人態度の因子としては、自己優先的態度及び状況依存的態度という二つの因子を導いた上で、生活満足度、対人感情及び対人態度の関連について、生活満足度が対人感情及び対人態度に影響を及ぼし、対人感情の変化が対人態度の変化に影響を及ぼすであろうという因果関係を想定し、共分散構造分析を用いて検討した。

分析の結果、生活満足度が低下すれば、対人感情が悪化し、偏った対人態度を強めやすくなること、また、生活満足度のみが上昇した場合、偏った対人態度、特に、状況依存的態度を強めやすくなるという結果が見いだされた。すなわち、家族関係や友人関係などが親和的で、全般的な生活場面での満足度が上昇すれば、対人感情が好転し、偏った対人態度も緩和すると予想されるが、対人感情の改善を伴わず、生活満足度のみが上昇した場合、無責任な状況依存的態度が強まることも予想される。

以上の点も含め、今後も非行少年の意識を経年で比較し、その変化を詳細に検討することは、非行のメカニズムを探る上でも、非行を未然に防ぐ上でも、重要な基礎資料を提供することになるものと考え